# 泥中の蓮

華乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥中の蓮

【Ｎコード】

Ｎ１５５３Ｏ

【作者名】

華乃

【あらすじ】

石川絢子は父と職を一度に失い、中学、高校時代を過ごした街へ戻って来た。

ふとした縁で中学時代の同級生である医師となった市原光宏、彼の幼なじみである妹尾昌美と出会う。

絢子は、光宏にとって初恋の人だった――運命の歯車が音を立てて回り始める。

※１　不定期更新です。

※２　自サイト「雨の夜」にて改稿を始めました。（２０１１．９）

## 予感と言うには曖昧な、　1

街の外れのごく小さなアパートにその女は住んでいる。名前は石川絢子（しかわあやこ）といい、昨日二十八になったばかりだ。若い女が住むにはいささか不似合いなぼろアパートだったが、絢子は少しも気にしていなかった。

彼女は彼女の父親とひとつ上の兄の三人で、父親の生まれ故郷だという街で暮らしていたのだが、兄が結婚して家庭を持って家を出た途端に今度は父親が病気であっけなく死んでしまった。絢子の父は婿養子であったが、既に故人となっていた母親の墓に入れてもらうのに散々苦労した。

父親は縁者と親しくするでもなく、絢子が就職してからの五年を親子三人でひっそりと暮らした。三人で暮らしていた３ＬＤＫのマンションはひとりには広すぎると絢子は主張し、兄の大輔（だいすけ）も渋々ながら折れ、そこを売却して得たお金を兄と分け合って家を出ることにした。

不幸というのは続くもので、絢子の父が亡くなってから程なく、それまで勤めていた会社がこの不況で倒産の憂き目に遭った。昨年末のことだ。結果、彼女は年始から職探しを余儀なくされた。

「若い女性が住むには向きませんよ」

ここに越してくるとき、駅前の不動産屋で最初にこう言われたのだが、向かないどころか自分には最適だと絢子は思った。マンションはタイミングよく売却できたのだが、せっかく父親の残したものを金銭にしてしまうことに罪悪感もあり、受け取ったお金には手をつけられないでいた。前の会社で働いていたころに貯めたお金はそ

れなりの金額で残してあったが、できるだけそれにも手をつけたくなかった。
ハローワークで苦労して見つけた会社には、兄の家に居候しながら片道二時間をかけて通勤していた。兄には生活にかかるお金の幾らかを渡していたが、義姉は良い顔をしなかった。
この街からであれば会社まで片道三十分で済み、ぼろアパートなだけに家賃も破格に安い。絢子にとっては願ったりかなったりで一も二もなくそこに決め、兄の家を出た。なによりこの街は、絢子が中学、高校と青春時代を過ごした大切な思い出の場所でもあった。

二月の半ばから勤め始めた小さな会社は医療器具を扱っている。この会社には事務員という者が絢子の他にパート従業員で一人いるばかりだ。あとは営業職の男性が三十代から五十代までの合わせて五人、技術職の二十代と五十代の男性が二人、おそらく六十を幾ばくか越えているだろう社長の中島（なかしま）とその妻の百合子（ゆりこ）で、絢子を合わせても全員で十一人の零細企業だ。
仕事は何の変哲もない事務職で、絢子は前職での経理の経験を買われて入社したはずだった。しかし、なにしろ事務員が二人しかおらず、もう一人はパートタイムで十時から三時までしかいない。この人は子供の病気や学校の行事でたびたび休むので、戦力としてはほとんど期待できなかった。
電話応対、来客応対、商品の受発注、それにかかる伝票処理、納品書や請求書を発行し、売上のデータを作り、百合子に指示されて行う現金の出し入れを含んだ経理の処理と、仕事は毎日山のようにあった。当然掃除してくれる人など雇っていないので、トイレ掃除も含めて毎朝出勤している皆で手分けして行う。前にいた事務員はあまりの忙しさに嫌になって辞めてしまったというが、絢子は少しも苦痛だと思わなかった。

## 予感と言うには曖昧な、　2

ある晴れた金曜日の午後、絢子は銀行に行った帰り道で中学の同級生にばったり会った。妹尾昌美（せのおまさみ）と名前を名乗られると、絢子も彼女をすぐに思い出した。昌美は外出の途中なのだと言って笑った。絢子はすぐには気づかなかったが、昌美は一目見て絢子だとわかって声をかけた。当時は特に親しいわけでもなかったのだが、懐かしい気持ちは絢子のほうにもそれなりにあった。

少しの間世間話――当たり障りのない、いつ帰ってきたのかとか、どこで働いているのかとか、他愛のない話――をしてから、彼女は絢子を同窓会に誘った。中学三年生のときに同じクラスだった者たちで今夜集まることになっているからと言い、昌美は店の名前と電話番号、簡単な地図が載った紙を持っていたバッグから取り出すと、返事をしない絢子に手渡した。一通り定型の挨拶をしてからふたりは別れ、絢子はふたたび会社に戻る道を歩き始めた。

学生時代の友人とはほとんど疎遠になっており、自分が行っていいのかと絢子は迷いはしたのだが、せっかく誘ってくれた彼女に悪いと行くことにした。残業を一時間やってから更衣室で私服に着替え、軽く化粧を直して会社を出た。店は、絢子がいつもおつかいで行く銀行の裏の路地を一本入ったところにある居酒屋だった。

絢子がその店に着いたのは、ちょうど十九時を回ったところだった。誘ってくれた昌美の名前を出して個室になっている席に案内されると、既に集まっていた何人かで始めていた。誰が誰やらわからぬままに、絢子は名前を名乗って挨拶すると、驚きの声が上がった。

絢子の心配は杞憂に終わった。かつての同級生たちは思いの外再会に喜んでくれたのだ。一通り、現状を尋ねる質問に絢子が答え終わったころ、絢子を同窓会に誘った昌美ともう一人、背の高い彼女

と同じくらいの背格好の男が入って来た。昌美は昼間と同じように中くらいの高さのヒールの靴を履いているので、彼のほうは百七十を少し超えるくらいだろうか。ふたりは並んで絢子の目の前に座った。

「石川さん、帰ってきてたんだ…」

昌美のとなりに座ったその男も他の皆と同じように驚いたのだが、彼は絢子が名乗る前に昌美と同じように絢子の名前を呼んだ。もしかしたら彼女に聞いていたのかもしれないと絢子は思った。しかし、絢子のほうは彼を思い出せなかった。

「石川さん、こいつのこと覚えてないでしょ」

絢子のとなりに座っている男は彼を指さしてニヤニヤしながらそう言うと、他の皆も大笑いしている。絢子がきょとんとしているのを見て、それが正しいことを知った彼は諦めて名前を名乗った。

「僕は石川さんのこと、覚えてたんだけどな…石川さんは覚えてないかもしれないけど、僕は市原、市原光宏（いちはらみつひろ）です」

絢子も今度はすぐに思い出した。そう言われれば面影が残っている目の前の彼――市原光宏のことは、絢子の記憶の中に印象深く刻まれていた。

「市原くん、覚えてますよ。イシカワとイチハラで、わたしもよく聞き間違って返事したりしたから」

「良かったね～イチ、石川さんの記憶の片隅にあって」

ふたたび茶化されると、光宏の頬は少し赤くなった。絢子が不思議に思っていると、静観していた昌美が絢子に思いもよらぬことを告白した。

「石川さんは初恋の人だもんね、みっちゃんの。痛っ、なにすんのよ〜」

光宏は真っ赤になって昌美の頭をはたくと、またもや笑いに包まれた。絢子は恥ずかしさのあまり頬を赤らめてうつむいてしまった。それを見た光宏はあわてた。彼は昔秘めていた思いをこんなふうに明かされて焦った――確かに昌美から聞いて楽しみにしていたけど、こんなふうに彼女の居心地を悪くするつもりはなかったのに――と。

「ごめん、石川さん。覚えてないかもしれないけど、こいつ、昌美は子供のころからの幼なじみだから、あることないこと適当に言っていつも僕をからかうのが趣味になってるんだ」

だから、気にしないで――光宏は小さな声でそう付け足すと、絢子はうつむいていた顔を少し上げて「大丈夫」と言った。彼女の頬はまだうっすらと赤い。光宏は呆けたように彼女を見つめた。

それは予感と言うには曖昧な、本人たちもそれと気づかないほどのささやかな知らせだった。

## その瞳の苛烈　1

土曜日、光宏はたびたび昨晩の絢子のことを思い出しては赤くなり、患者にからかわれていた。

お年寄りと子供から特に人気のある若いこの医師は、勤務している大学病院の許可を得て、こうして毎週土曜日に外来勤務をしている。こんな生活がもう二年になろうとしていた。

光宏は、この小さな市原クリニックの院長の長男として産まれた。市原の家は代々医者の家系で、彼の両親はともに医師、ひとつ下の妹は薬剤師である。彼は医師になるべく周囲から期待され、その穏やかな性格が幸いしてか、その期待通りに医師になった。

普段は大学病院の勤務医として週のほとんどを過ごしており、現在の彼に休みらしい休みはほとんどない。例に漏れず手にする金はわずかだが、光宏にはあまり不満がなかった。他の勤務医とは違い、アルバイトの必要のないお坊ちゃんらしく、金銭に頓着しないと言ったほうが正しいのかもしれないが。

昨夜は三年ぶりの同窓会で、三年前に参加しなかった光宏にとっては実に五年ぶりの旧友たちとの再会だった。それだけでも楽しみではあった。しかし。

———まさか石川さんが来るなんて。

幼なじみの妹尾昌美は、いつも同窓会の幹事を引き受けてくれる、皆にとってありがたい存在だ。昨日の午後、その彼女からのメールを開いて見たときは驚きのあまり声が出た。

『中学のときの同級生の石川さんに会ったよ。今日の同窓会に誘っておいたから、来るかもね。みっちゃん、楽しみ？　わたしに感謝しなさいよね！』

昌美に言われるまでもなく、光宏の心臓はそれを機に跳ね上がっていた。今日はどんなことがあっても、三十分でもいいから顔を出さなければならない――そう心に決めた彼は、予想通り途中で病院から呼び出されるまで店で粘った。

光宏は去り際に、絢子に連絡先を尋ねた。彼女が携帯電話を持っていないと知ったときの皆の衝撃はそれはすごかったのだが、ともかくなんとか自宅の電話番号を聞き出すことに成功して、その場で自分の携帯のメモリーに登録したのだった。

石川絢子は中学一年の終わりにやって来た転校生だった。一学年に四クラスしかないその小さな中学校の中で、彼女は一際輝く少女だった。上級生は彼女見たさに引きも切らず、同級生たちは恐れをなして遠巻きに彼女の様子をうかがった。

光宏も遠巻きに眺めるだけの生徒のひとりに過ぎなかった。絢子は目鼻立ちがくっきり整った正統派の美人で、その容姿は非の打ちどころがなかった。

転校してきてすぐに陸上部に入部して以降、絢子は毎日トラックを走っていた。おかげで陸上部は入部希望者が殺到したというのを、光宏も噂で聞いていた。

彼自身はサッカー部員ではあったのだが、まるきり目立たない万年補欠の座に甘んじており、彼女のさわやかな走りを時折横目に見ながら、淡々と練習をしていた。

美しいフォームで走る彼女を見るのは、光宏にとって楽しみだっ

た。均整のとれた体つき、細いながらも力強い腕振り、すらりと伸びた脚に引き締まった足首、彼女の姿を邪な目で見る者は浄化されているに違いなかった。

光宏は、彼女がスタートを切る前の、位置について顔を上げたときのまなざしがなにより好きだった。その瞳の苛烈さに、毎回彼は息をのんだ。そしてスタートの合図とともに誰よりも早く飛び出して、歩を進めるごとにぐんぐんと引き離していく。

あの瞳から時折こうして覗かせるこの激しくも厳しい光――それの意味するものを、光宏は知りたいと強く願った。

二年に上がった春、二人は同じクラスになり、はじめて言葉を交わす。イチハラとイシカワというその良く似た発音のおかげで、光宏は絢子に笑いかけられ舞い上がる。彼がこれほどこの名字に感謝したのもこれがはじめてだっただろう。

しかし、二人の間に起こった出来事はたったそれだけだった。ときどき同じように聞き間違えては返事をし、お互いを認識して彼女に笑いかけられて舞い上がる、その繰り返しだけで一年間はあっという間に過ぎた。

絢子が転校してきた理由を光宏が知ったのは、持ち上がりでクラス替えのない三年の春だ。彼女の住む家はこのあたりでは旧家として知られており、彼女の母親はその石川家の当時の当主のひとり娘だった。

彼女の母親は、父親と別居して実家に戻って来て以来、身体が弱って伏せっているようだ――というのは昌美が聞いてきた話だった。彼女本人には誰ひとり真実を尋ねることはできず、噂ばかりがひとり歩きしていた。

## その瞳の苛烈　2

――――きっとわたしの気持ちなんてとうの昔にわかっていて、そのくせ無意識でわたしを利用してるんだ。あいつはそういうやつだよ。わかってて好きになったわたしが馬鹿なんだもん。それもよーくわかってるもん。

昌美は、その恋心をふたたび自覚してから何度となく繰り返したひとりごとを、心の中でまたつぶやく。急に当直を頼まれたという光宏は昨晩、何度も絢子に電話したらしい。絢子は留守のようで電話には出ず、一応留守番電話に入れたは入れたらしいのだが、緊張している間に時間は過ぎ、肝心の携帯の番号を入れそびれてしまったのだと彼は言う。

絢子の家の電話機が着信履歴の残るものであれば問題はないのだろうが、そうでなければ光宏の番号を彼女に知らせることは、彼がもう一度かけ直す以外に永遠に不可能だ。

なにが悲しくて元カレの初恋の人に、元カレの番号を伝えにゃならんのかと昌美は強い苛立ちを感じてはいる。しかしながら、光宏のほうから見た現在の昌美の立場は、ずいぶん昔に別れた元カノではあっても、気の置けない幼なじみといったほうがしっくりくるのだろう。

こんなことを頼める人間はわたしの他にはいないのだとそのたびに考えて、昌美は言いようのない優越感も感じていた。

光宏と昌美は幼稚園の年少組からの付き合いで、お互いに知りすぎているほどの関係だ。高校までずっと同じ学校で、大学こそ分かれた――光宏は近県の医大へ、昌美は地元の短大にそれぞれ進学し

た後も交流はつづいた。
交流というのは正しくない。二人は離れて一年近く経ったころから、肉体関係を含んだ恋人どうしとして付き合い始めたのだから。
振り返ると馬鹿馬鹿しいほどに必死だった当時の自分を、昌美は苦い気持ちで思い出す。告白したのも自分なら別れを切り出したのも他ならぬ自分だったのだ。彼はただ肯いただけだった。
別れた理由は単純だ。光宏は昌美を幼なじみとして以上には必要としていないことを、彼女が思い知らされたからだ。初恋の人を見ていたような目では、彼は一度も昌美を見なかった。そのことが昌美を苦しめたのだ。

――我ながら健気過ぎてアホらしい。

昌美は本人から聞いたときに登録したメモリーを探し出すと、絢子に連絡をした。
今日は日曜日、時刻は午前十時。彼は当直の翌日である今日は終日勤務だと言う。「今日は電話に出られないし、明日は久しぶりの休日だからどうしても番号を知らせたいんだ」と電話口で笑ってさえいた。その大事な休日を潰してまで一番会いたい人に会いに行こうとする彼、そのための手伝いを進んでやる自分。本当に不毛だと昌美は思った。
それでも、やらなければならない。
ワンコール、ツーコール…わりと早く受話器は上げられた。
『はい、石川でございます』
留守番電話ではない生の絢子の声を電話越しに聞いた昌美にたち

まち緊張が走った。もう一度会わせたくない――その気持ちが昌美を襲った。手には汗をかいている。

『あの…どちらさまですか』

絢子は電話をかけてきた主に尋ねる。明らかに不審がっている様子だ。昌美は観念した。

「ごめんなさい、わたし。妹尾です。妹尾昌美です」

『ああ、妹尾さんだったの。この間はありがとう。とても楽しかったから、ぜひお礼を言いたいと思ってたの』

「ううん、こちらこそ楽しかったよ～。石川さんが来てくれて、みんなホントに喜んでたし」

一番喜んでいたのはみっちゃんだけど――と、昌美は心の中で付け足す。中学時代からまっすぐだった彼。皆が知っていた。

『よかった。また機会があったら誘ってね』

定型通りの台詞。絢子の言葉が真実そう望んでいるのかどうか、昌美にはわかりかねた。

「あのね…みっちゃん…あ～、市原光宏のことなんだけど、彼が何度かお宅に電話したと思うんだけど…」

『あ…ええ…』

どうして知っているのかという問いが聞こえてきたような気がし

て、昌美は身構えた。絢子は昌美の返答で光宏の本気の度合いを試そうとしているのではないか。昌美はそう思った。
会わせたくなくても、いつか二人は会ってしまうのだろう。であれば、自分が感知できる今、そのきっかけづくりに加わるのは悪くない。そう彼女は考えた。会ってもうまくいくとは限らないではないか――。

「みっちゃんがね、昨晩当直だったらしくて。今日も一日勤務中だから連絡を受けられないしってさっき電話があって」

『……そうなんだ』

「それにね、あいつ番号入れそびれたから連絡しといてくれなんて言うの～。だから電話してみたってわけよ」

昌美はいつもより一段明るめの声を出すように努めた。言葉を繋ぐのを今止めたら泣いてしまいそうだった。彼女は携帯を一度離してゆっくり息を吐き、残りを続けた。

「メモしてもらってもいいかな」

昌美は光宏の番号を伝えた。絢子は素直にメモを取ったようだった。

## 知りたいと願う罪悪　1

絢子の勤める会社は月に一度土曜出勤があり、たいていは半日だけなのだが、この日はたまたま忙しくて終日出勤となった。社長の妻である百合子は土曜日は出勤しないため、経理関係の仕事はすべて月曜に持ち越しとなった。

帰宅途中の商店街で五十円引きになった総菜を買ってぼろアパートに戻ると、途端に絢子の身体から食欲は失せ、疲れに任せてベッドに横になると強烈な睡魔に襲われた。

起きたのは朝の五時で、外はもう明るかった。絢子は着衣のまま化粧すら落とさずに寝てしまったことを恥じたが、悔んでいても仕方がないと開き直って浴槽にお湯を張った。

このぼろアパートの利点のひとつは浴槽が広いことだった。昔ながらの風呂場にシャワーを付けただけの浴室だが、ひとり暮らしのアパートに多いユニットバスではなく、外に洗面所と和式トイレがそれぞれ独立していた。

留守番電話にメッセージがあることを示すランプが点滅しているのに気づいて再生する。市原光宏からだった。彼は連絡してと言っているのに、番号を言わないまま録音は切れてしまった。これでは電話のかけようがない。

お湯が溜まったことを確認してから浴室に入り、髪の毛と身体を洗ってお湯に浸かった。数少ない贅沢である入浴剤はバラの香りで、絢子は心身ともに癒される。よく温まったところでお湯から出た。

浴室を出た途端、絢子のお腹は音を立てて空腹を訴えた。誰に向けてでもなくひとり微笑むと、二口あるガスコンロの一方でお湯を

沸かす。昨日買った総菜を皿にあけ、冷凍庫から小分けしたご飯を取り出すと、それらを交互に電子レンジで温めた。その間に小さなキッチンで手早くみそ汁とサラダをつくって、部屋の真ん中の小さな卓袱台にそれらを運ぶ。急須に茶葉を入れ、少し冷ましたお湯を注いで、蓋をした。

蒸らしが終わったころに煎茶を湯呑に注ぎ、古いオーディオから流れる音楽を聞きながら、小さな卓袱台でそれらを食べる。

この部屋にはテレビがない。絢子はテレビを見ないので、マンションを売却するときに、不要なものとともにすべて処分してしまったのだ。

ここに持ち込んだのは大き目の冷蔵庫と洗濯機だけで、あとはリサイクルショップなどで安く手に入れたものばかりだ。今日は一日仕事が休みだから、モバイルパソコンを見に行こうと絢子は計画している。これは新品を買うつもりだった。

ふいに電話が鳴った。この電話番号を知るものは限られている。時計を見ると、十時を指していた。

「はい、石川でございます」

息をのむような感じはしたが、返事はない。

仕方なく問いかけてみる。

「あの…どちらさまですか」

『ごめんなさい、わたし。妹尾です。妹尾昌美です』

「ああ、妹尾さんだったの。この間はありがとう。とても楽しかっ

たから、ぜひお礼を言いたいと思ってたの」

本当だった。あんなふうに誘ってもらわなければ、翌日は少々うんざりした気持ちで土曜出勤に向かわなくてはならなかったのだ。

『ううん、こちらこそ楽しかったよ～。石川さんが来てくれて、みんなホントに喜んでたし』

「よかった。また機会があったら誘ってね」

昌美のほうからかけてきてくれるとは思っていなかったが、絢子はかけてきてくれたことに感謝していた。また参加してもいいなら、参加したいとも思っていた。

『あのね…みっちゃん…あ～、市原光宏のことなんだけど、彼が何度かお宅に電話したと思うんだけど…』

電話の向こうの昌美は、急に奥歯にものが挟まったような歯切れの悪い話しぶりに変わった。そのことが絢子を戸惑わせる。

「あ…ええ…」

『みっちゃんがね、昨晩当直だったらしくて。今日も一日勤務中だから連絡を受けられないしってさっき電話があって』

――――きっと彼女は市原くんのことが好きなのね…。

「……そうなんだ」

『それにね、あいつ番号入れそびれたから連絡しといてくれなんて

言うの〜。だから電話してみたってわけよ』

絢子の想像は確かなものだった。明らかに昌美の声は明るさを装っている。市原くんは女心がわからない男の典型かもしれない――と絢子は心の中で思った。

『メモしてもらってもいいかな』

絢子は言われるままにメモを取る。彼女は光宏にとりあえずお礼の連絡をしようとは思ったが、彼に対して何の興味も持ってはいなかった。

昌美はほっとしたようにさよならを言い、絢子はまたねと返す。二人の接触はこの後しばらくなかった。

## 知りたいと願う罪悪　2

家電量販店に着いたのはお昼過ぎで、たくさんの人でにぎわっていた。目に映る人たちは皆一様に幸せそうに見えて、絢子は少しくらくらした。

パソコンの展示コーナーに行くと、熱心に小さなパソコンをいくつも見比べた。携帯電話を持っていないから、パソコンと携帯電話の両方を買うくらいならモバイルパソコンを買おう――絢子はそう思っていたからだ。

いくつかの機種に絞ったが決め手に欠くため、冊子をもらってその場を後にした。途中携帯電話の展示コーナーがあり、少しだけと足を止めた。どれも高価なもので、携帯を持ったことがないわけではないが、絢子に使いこなせるのか疑問だった。こちらも冊子をもらい、そのまま店を後にした。

帰り道でいくつかの店に立ち寄って食料と生活用品を買い揃え、絢子は自宅に戻った。エコバッグから買ったものを取り出しながら、冷蔵の必要な食料は冷蔵庫に入れ、冷蔵の必要のないものはそれぞれストックしてある場所にしまう。続いて一人分のコーヒーをつくってマグカップに注ぎ、卓袱台に置いた。

それからしばらく、絢子はコーヒーを片手にもらってきたパソコンと携帯電話の冊子を見るともなく眺めていた。

ふと気づくと外は暗くなっていて、絢子はあわててカーテンを閉めた。そのままキッチンに移動して食事をつくって卓袱台に並べ、食事をした。時計を見るともう夜の八時を指している。

――市原くんに電話をしなくちゃ。

絢子は、今朝番号を言われるままメモした紙を見ながら光宏の携帯に電話をかけた。光宏の携帯はワンコールを待たずに繋がった。

「市原さんの携帯ですか。石川と申しますが」

『石川さん、かけてきてくれたんだ。よかった』

電話の向こうはガヤガヤと音がしており、光宏は外にいるようだった。

『ごめん。もう少しで家だから、ちょっとだけ待っててくれる？あと五分だけでいいから』

「ええ、わかりました」

『じゃ、またかけ直すから』

光宏はそう言ったかと思うと直後に電話を切った。絢子は受話器をゆっくりと戻すと、言われた通り少しだけ待つことにした。

『はい、石川でございます』

絢子のゆったりとした優しげな声が耳元に流れてくると、光宏の身体にふたたび襲ってきていたさっきまでの疲れがすべて吹き飛んだ。

今玄関のドアを開けて入って来たばかりで息が切れている。手に

持った携帯を耳から外すと、少し息を整えながらリビングまで移動し、ふたたび携帯を耳に当てた。

「ごめん、石川さん？　僕です。市原です」

『あ、こんばんは。この間の同窓会は楽しかったです。どうもありがとう』

「こっちこそ途中で抜けちゃってごめん。昨日教えてもらった石川さんの留守電に番号入れられなくて焦ったんだけど、かけてきてくれて助かったよ」

昌美はいつも光宏を助けてくれる。結果的に利用してしまった自分に嫌なものも感じるが、絢子との繋がりを天秤にかければ答えは自ずと見えてくる。

「ところで、石川さんは明日の夜予定ある？」

――――空いててくれ。

『いえ、特には』

光宏は携帯を右手から左手に持ち替えて、右手をぎゅっと力を入れて握った。勇気を得てさらに言葉を繋ぐ。

「よかったら食事でもしない？」

『えっ…』

「明日、僕ね、二週間ぶりの休みで、せっかくの休みだからどこか

出かけたいんだけど月曜日だから人もつかまらなくて」

もちろんつかまえようとすらしてないけど――と光宏は心でつぶやく。会いたいのは絢子だ。一緒にいたいのも絢子だ。このチャンスを逃したくない。

『…あの、ふたりきりで？』

明らかに警戒されていた。もしかしたら付き合っている彼氏がいるのかもしれないと光宏は思った。絢子の控えめで質素な暮らしぶりを知らない彼は、つい周りにいる同年代の女性を思い浮かべてしまう。

「そう、ふたりで。都合悪い？」

これは相手に好意があるとはっきり伝えたも同じことだ。彼氏の有無を確かめるために鎌をかけてみる。どのみち答えがきちんと返ってくるとは思ってはいない。

絢子のような年ごろの女に彼氏がいる可能性は、光宏の想定内だ。それでも彼は彼女のことを知りたいと願う。そう願うことは罪悪だろうか。

『わかりました。何時にどこに行けばいいの？』

気が変わらぬようにと、光宏は逸る気持ちを抑えて時間と場所を伝える。絢子がわかりましたと返事をしてから電話を切ると、するすると身体の力が抜けていった。

携帯を持って寝室に移動し、来ている服を床に脱ぎ捨てた。このまま寝てしまおう――でも、寝すぎないように目覚ましをかけなければならない。

ともかく絢子を誘うことは成功した。ただそれだけのことがうれしくて、光宏はそのまま心地よい疲れの残る身体をベッドに横たえて、安心したように眠った。

## 気づいたら、もう遅い　1

月曜日の朝、絢子は珍しく寝坊をした。昨夜の電話の内容が彼女の頭の中でぐるぐると巡り、七周ほどしたところから記憶がなくなっている。

あわてて飛び起きて時計を確認すると、もう七時をとっくに過ぎている。いつものように始業三十分前に席に着いてあれこれ仕事の準備を始めるのにはもう遅く、絢子は諦めてせめて始業十分前から始める掃除に間に合うようにと急いで準備を始めた。

さっとシャワーを浴びて濡れた髪を乾かし、髪を頭のてっぺんでゆるくまとめておだんごヘアにした。ヨーグルトを器にあけて上から蜂蜜をかけて食べ、レンジで温めたホットミルクを飲んで朝食を済ませた。

そこまで終えて時計を見ると、既に七時四十五分を回っていた。

――急がなきゃ！

コンシーラーを叩きこんでしっかりとクマを隠し、薄づきのリキッドファンデを顔の中心から外へと薄くのばして、馴染むように指で叩きこむ。ティッシュペーパーで顔全体を一度押さえて余分なファンデを吸い取ったら、粉おしろいをブラシで一撫でし、透明マスカラを塗り、眉を整え、リップグロスを塗ったらメイクも完了だ。

目鼻立ちのくっきり整っている絢子の顔は、足せば足すほどにくどくなるので、彼女はアイラインも描かないし、アイシャドウも使わない。フォーマルな場所に出かける必要も今のところなく、メイク道具も簡素だった。

ゴールドのフックタイプのピアスは薄紫に見える天然石のチャー

ムをつけたもので、それをつけたところで時計をふたたびちらりと見れば、さらに十五分が経過していた。

早速用意しておいた服に着替える。制服がある上にこじんまりとした会社でもあるので特別な服装の規定もないのだが、一応今日は光宏との食事の約束もあるからと昨晩用意しておいたのだった。

白ベースの小花プリントのワンピースの丈は太ももの半分が隠れるくらいで短めなので、下にはライトグレーのタイツを履く。このタイツは、温かいわりに雰囲気は春らしく軽く見える優れものだ。

外はまだ肌寒いので濃紺のノーカラージャケットを羽織って、ふわりと薄紫のストールを巻き、白のミニボストンを手に、玄関先の姿見でチェックする。

どれも高価なものではないが、自分が気に入っているものばかりに身を包まれて、絢子の心も少しばかり浮き立った。

玄関先で腕時計をちらりと確認すると八時十五分だった。艶を抑えたシルバーのバレエシューズを履いたところで、ながら聞きしていたラジオで雨の予報が出ていたことを思い出し、絢子は薄桃色の折り畳み傘をあわててつかんで表に出る。

カンカンカンと階段を急いでおりて、駅まで五分の距離を少しでも縮めるように走った。

駅に着いた途端、パラパラと雨が降り始めた。絢子は雨の予報を思い出した自分をちらっと心の中で褒める。

改札を走り抜けてホームに着くと、いつも乗る時間より既にかなり遅れた電車がホームに到着しており、ぎりぎり間に合ったところでドアは閉まった。彼女は呼吸を整えるために大きく三回ほど深呼吸し、鼻から下を隠すようにしてハンカチを口元に当てた。

今朝は掃除には間に合わなかった。他の社員からは珍しがられるだけで特に文句を言われることもなかったが、絢子は深く反省していた。

今日は午後一番で社長に来客がある予定なので、彼女が準備しなければならない。今日は一日、持ち越した経理の仕事もあってかなりあわただしい。月曜日はパートの女性が休みの日だ。

直行した営業社員からは今日中というような緊急の用事以外はメールで連絡をもらっているのだが、それが朝一番から何件も溜まっていて処理に苦慮した。

いつもの昼休みは留守番がてら手づくり弁当で節約するのだが、今日は昼休みもそこそこに仕事に取り掛かる。約束は守らなくてはならないので、絢子はなんとか定時に仕事を終わらせようと終日努力した。

午後一時前に社長が出社してきて、二時には来客があった。今朝来客を思い出して応接室を掃除してあったので、絢子は安心していた。来客は三時には帰り、彼女の仕事は時間との戦いとなった。

定時の六時を一時間過ぎたところでやっと切りがつき、会社に残った数人の社員に挨拶をすると、絢子は急いで私服に着替えて化粧直しをした。

光宏との約束は七時、この間行った店の入っているビルの四階にある店で待ち合わせになっている。勤務医である彼は今日は休みだが、呼び出しがかかれば即キャンセルになる。

時間はとうに過ぎていたが、携帯電話を持っていない絢子は目当ての公衆電話を見つけて光宏に電話をかけた。

彼はすぐに出た。後ろからは人の話声などの雑音が細切れに聞こえてくる。

『少し待って』

言われた通り待っていると、ふたたび光宏の声がした。店の外に出たらしかった。きっと静かな店なのだろうと絢子は思った。

「もう近くまで来てるから、一応連絡してみたの」

『うん。待ってるから』

「ええ、わかりました。じゃ、後で」

絢子はあわてて受話器を置いて電話ボックスを出ると、急いで目的地に向かった。

会社からそのまま店に行ってもよかったのだろうが、彼女を躊躇させるなにかがあった。彼女にもそれがなんなのかはわからない。しかし、絢子は店に着く前に彼の所在をどうしても確かめたかった。

――そこに彼がいなければ、わたしは…。

頭を過ぎった余計な考えを捨て去り、目的地へ早く着くように絢子は歩みを速めた。

## 気づいたら、もう遅い　2

絢子が店に着いたのは、約束の時間から三十分遅れた七時半だった。この間同窓会で使った居酒屋とは趣が違い、広々とした空間に十分な隙間を取ってテーブルが並んでいる。客の年齢層も比較的高く、誰の身なりも砕けすぎてはいなかった。

案内されたテーブルに着くと、光宏は絢子に飲みたいものを尋ねた。店員を呼び、彼女は生ビールを頼み、彼はハーフアンドハーフを頼んだ。メニューを見ながらふたりは相談し、結果いくつかの料理も併せて注文した。

店員がテーブルから去ると、まずは絢子が遅れた詫びを入れた。

「今日は誘ってくれてありがとう。急いだつもりだったんだけど遅れてしまってごめんなさい」

言いながら絢子が頭を下げると、光宏は目の前に手をかざして「そんなのいいんだよ」と言った。それを受けた彼女が目を見て再度お礼を言うと、彼はかすかに頬を赤らめて言った。

「こちらこそ、来てくれてありがとう。来てくれるかは半信半疑だったんだけど」

「約束は守るわ」

「それでも――」

そこで店員が飲みものとお通しを運んできたので、話を中断してグラスを会わせ、乾杯をした。飲みものに口をつけ、お通しをつつきながら、ふたりはふたたび話を始める。

彼の近況を、彼女の近況を、交互に質問し合うかたちでお互いのことを知り合っていく。彼らは時間にしてほんの三十分ほど会っただけの昔の同級生で、同じクラスだった当時も言葉を交わすことはほとんどなかったため、特に絢子のほうは知らないことがほとんどである。

しばらくするうちに次々と注文した料理が運ばれてきた。料理はとても美味しく、場をさらに和ませた。絢子は光宏が医師であることはこの間教わって知ったが、彼の実家が病院だということさえ知らなかった。しかし、彼とする昔の話は温かくて懐かしく、絢子にあった強い警戒心を少しずつ解いていった。

懐かしい話をするうちに、それはいつしかふたりの距離を少しずつ近づけ、絢子は光宏に自分のことをぽつぽつと話し始めた。

「市原くんが知ってるころのわたしは母の実家に住んでいたんだけど…」

絢子が少し言い淀んでいると、「知ってる」と光宏がうつむき加減でつぶやいた。それに勇気を得て、絢子は話を続けた。

「母は病気がちだったから、実家に戻されたの。離婚はしていなかったけど、父は婿養子なのに家には入れてもらえなくて…」

彼女は当時を思い出したのか、大きな目が潤んでいた。幾度か瞬きをしてそれをこらえ、また話を続ける。

「母はわたしが高校三年のときに亡くなったんだけど、父は葬式にも呼んでもらえなかったの。でも優しい人で、わたしも兄も父が大好きだった」

「お母さんのお葬式には、実は僕も参列させてもらったんだ」

「そうだったの。気づかなくてごめんなさい」

「いいんだ」

光宏は余分な言葉を言わず、ただ静かに相槌を打って絢子の話を聞いた。

「大学に行かせてもらったのは感謝してるけど、わたしは卒業してから石川の家を出たわ。あの家はわたしには重すぎて、いつか潰されると思ったから」

ぽつり、ぽつり、つぶやくように話す絢子を、光宏は真剣なまなざしで見つめた。ときどき目が合って、お互いに目をそらし、ふたりともが頬を赤らめた。

「それで就職してから去年までずっと父と兄と三人で暮らしてきたの。そこは父の故郷だって言ってたわ」

「今は？」

絢子はうつむき加減で首を横に小さく振った。それはまるで小さな女の子のようで、光宏は胸が絞られるような切なさで一杯になっていった。

「兄がね、去年結婚したのよ。今は兄たちは離れて暮らしてるの。その後、父が病気になってしまって―」

絢子はそこで新たに運ばれてきた白ワインをひとくち口にした。

「気づいたら、もう遅かったの…お父さんは…父は、わたしが会社から帰ってきたときには既に気を失ったように倒れてて…わたしが、見つけたの…足が震えて動けなかった…なにもできなかった、なにも」

絢子は大きく深呼吸して涙を引っ込める。店内は少しずつ客が入れ替わり始めていた。

“ Ｉｔ’ｓ ｔｏｏ ｌａｔｅ’“

気づいたときには、もう遅いの――絢子はひとりごとのようにつぶやくと黙り込んでしまった。光宏は声をかける言葉を見つけることができないで、ただ彼女を見つめるばかりだった。

## 空を見上げて貴方を思う　1

光宏は両親が彼の名義で購入した２ＬＤＫのマンションでひとりで暮らしている。ひとりで暮らすには十分すぎる広さで、二部屋あるうちの六畳ほどの一部屋は、まるで小さな古本屋のように所狭しと本が並べられていた。

このマンションは特別立派なものではなかったが、入口はオートロックで管理人が常駐しており、宅配ロッカーも完備されていて便利に使っている。ファミリータイプというよりは単身者向けの分譲マンションで、実際住人は彼のような単身者か、夫婦ふたりの世帯ばかりだった。周囲の環境には落ち着かなさがあって不満でも、総合的に見れば単身で住む環境としては申し分がなかった。

親の脛を齧ることに躊躇がないわけではなかったが、光宏の選択によらず齧れる脛があり、それを存分に齧れとばかりに与えられることに、彼は慣れる他なかった。社会に出てすぐは拒否の姿勢を貫こうとしたものの、それを受け取るのも親孝行だと言われては、お坊ちゃん育ちの彼に断ることなどできはしなかった。

絢子のほうがどうであるかはともかくとして、光宏にとっては絢子に接した中学生の自分がすべての原点だ。そこで光宏のその後の人生が決まったようなものだった。絢子との出会いは彼にとってそれほど大きなものだったのだが、ふたりで食事をしたときに話してくれた彼女の過去は、光宏をそれまで以上にのめり込ませていた。

絢子と食事をして以降、彼は何をしていてもたびたび彼女のことを考え、しばしば彼女を思い出していた。彼女に会う前よりもずっと大きく傾倒していた。封印した初恋は、今違う熱を持って再燃し

ていた。石川、という名前を見るだけで、それが石川県のことだろうと、ニュースで映し出されたスポーツ選手のことだろうと、彼は大きく動揺した。

光宏は、中学時代に彼が見ていた絢子と、彼女が話した過去の絢子を重ねてみたが、あまり一致しないことに驚いていた。二つの絢子を繋ぐのは、光宏があの当時好きだった苛烈な彼女の瞳だけである。彼女が一瞬だけ見せるあの光の意味していたものを、彼女に告白させることで少しでも知ってしまったことに、彼のほうは少し後悔もしていた。

絢子が光宏に心を開きかけたのは確かだ。何度もこらえた涙がこぼれ落ちることはなかったが、彼の何かが確実に彼女の感情を揺さぶった。好意を持たれたとは思っていなくても、そう思うことは十分に光宏を満たした。それでも、揺さぶられた彼女自身は今も決して心穏やかではないだろうと彼は思い、そのことは彼に暗い影を落とした。

十五の春、絢子と高校が分かれたことを知ったとき、光宏は自分の思いに区切りをつけた。絢子は光宏と同じ地元にある公立の高校にも合格はしていたが、既に合格していた隣町にある私立の女子高に進んだ。いずれも進学校ではあったが、隣町の女子高のほうが難易度は下であるにもかかわらずだ。

絢子がどうして女子高のほうを選んだのか、光宏にはわからない。この当時は知ることのなかった――この間彼女が話してくれた――彼女の母親の実家のせいかもしれなかった。彼の知る限り、彼女には親しくしているような友達は見当たらなかったが、この女子高に友達がいたのかもしれなかった。

父親と兄の話は数多くしてくれたのだが、絢子は母親の話を一切しなかった。そこに何かがあるだろうことはすぐにわかったが、光

宏は敢えて尋ねることはしなかった。いつか自分に彼女から話してくれるときがくればいいと彼は願っている。

区切りをつけて既に忘れ去ったと、何より彼自身が思っていた彼女の、その瞳をふたたび彼が目にした瞬間から、光宏は彼女に二度目の恋をしていた。

光宏は彼女が背負うもののすべてを受け入れて、あまつさえそれを一緒に背負おうと腹をくくった。彼女がなかなか受け取らなかったそれを無理やりに渡したのはそのためだ。それが彼女との間を繋ぐ糸になってくれたらいいと思う。十五のときには背負えなかったものを、絢子の代わりに背負えるだけの大人に――――彼はなっていた。

## 空を見上げて貴方を思う　2

絢子は、光宏とふたりで会った日から落ち着かない日々を過ごしていた。お酒に弱い性質ではなかったが、彼の何かが彼女の過去の扉を開かせて、まるで酔いに任せたようにつらつらと話していた。そして今、光宏のことを何ひとつ知らないで、自分のことを必要以上に知られてしまったことに、彼女はすっかり恐怖していた。

光宏とは中学時代も特に仲が良かったわけでもなく、特に親しく話をした記憶もない。ただ、彼の視線がときどき絢子を追っていることだけは彼女も気づいていた。それでも何を言われるでもなく、何をされるでもないその視線で、居心地が悪くなったことはない。

二十八年も生きていて、かつ絢子のような容姿の女であれば、見つめられたり告白されることは特別なことではなく、言い寄られたりしつこく付きまとわれたりすることもある。彼女はそれを仕方のないことと諦めているが、自身の選択により望んだことではなくても、周囲の人間に勝手に恨まれたりするような居心地の悪い雰囲気に、逃げ出したくなることも稀ではなかった。

その点、中学時代の光宏は淡々と絢子を見つめている、本当にただそれだけであった。イシカワとイチハラという似た響きの名字を持っていたことよりも、それが強い印象として残った。

あのころの彼が何を考え、どう感じていたのかは知らないし、今更知ったところで何もない。それなのに、絢子は今になってその当時の彼の目に宿る、見落としていたものを思い出したのだ。

ごく普通の――勉強以外では目立つことのない少年の――彼女を見つめる眼差しに込められた、狂おしいまでに激しい感情の色を。

会社としてもほとんど期待をしていないようではあったのだが、その年の夏、パートの女性が電話一本で辞めると言ってきて、あっという間に辞めてしまった。確かに絢子も戦力としての期待をしないようにはしてきたが、それでも細かい部分で助けられることは少なくなく、その女性の不在に一番の影響を受けているのが彼女であった。

社長の中島はできるだけ早く補充すると話してはくれたが、妻の百合子はそれに反対のようだ。絢子の働きだけで十分だと言わんばかりの態度は、真摯に仕事に取り組んでいる彼女の気持ちを萎えさせるには十分だった。

残業が毎日続く中で、忘れていた気持ちがゾンビのようによみがえってくる――何のために生き、何のために働くのか――。もう以前のようには働けなかった。感情を殺し、息をひそめて、毎日を細々と過ごし、そして生きながらえる。友達もおらず、家族とも疎遠で、男からは欲望の捌け口としてしか見られない、存在の薄い女。

今まで、死にたいと思ったこともそうしようとしたこともないが、これほど孤独な人間が何を支えに生きていけばいいのか、絢子は今、静かに途方に暮れていた。そして、ひとつの存在について思い出していた。

アパートに戻って持っていたバッグを置くと、着替えもせずに部屋の隅であるものを見つけて、部屋の真ん中の卓袱台の上に置いた。それは渡されて以来一度も開けられることなく、もらったときのそのままでそこに置かれていた。

絢子はいささかためらったが、思い切って箱を開けてみた。意外

に重いそのオレンジ色の箱の中から、くすんだ桃色のそれを手にとってみる。以前持っていたころよりも薄くて、ずっと軽い。
光宏は、ふたりで会ったあの日の帰り際、ずっと持っていた袋を受け取ろうとしない絢子に押しつけて言った。

『これは僕が、石川さんの自由に使ってほしくてプレゼントするんだ。料金は僕の口座から落ちるようになってるから心配はいらない。僕の番号は登録してあるから、時間を気にせずかけてきてほしい』

絢子が素直に受け取れるはずはないと、光宏も知っているはずだった。それでもその新品の携帯電話を彼女に渡して、彼はさよならを言って立ち去った。光宏はそれから絢子の自宅に電話をしてくることもなく、彼女はそれを捨てるに捨てられず、今日まで部屋の隅で埋もれさせているだけだった。
携帯電話など、ふたたび持つ気はなかった。そうまでして連絡を取りたい人など誰もいないのだから……。
開けてしまったからには、絢子も腹をくくった。充電をするべく、その真新しいままの携帯電話を電源に繋いで待った。まだ携帯の電源は入ってはいない。

## 空を見上げて貴方を思う　3

想像していたよりも長い時間が経っていた。この数ヶ月、光宏は外来勤務をこなし、いくつかの当直と緊急の呼び出しに耐えた。緊急の呼び出しは、いつも甘い期待をさせ、即座に失望と苛立ちを与えた。労さずして手に入れられるものは、もう何も必要としていなかった。

絢子が携帯電話を必要としていないことは理解していたつもりだ。おそらく光宏のこともまったく必要としていない。それでも彼にとっては、彼女と繋がる確かなものが必要だったから、一度くらいは電源を入れてくれるのではないかと期待して待っていた。仕事柄すぐに飛んでいくということができないとしても、それくらいの気持ちはいつも用意して待っていた。

光宏はごく普通の青年だ。当然ながら、これまでも数人の女性と付き合ってきた。そのうちの一人は昌美だが、彼女とは幼なじみの延長のようなものであったから、実際は肉体関係を含んだもっとも親密な友人と言ったほうが正しかったのではないかと彼は思っている。今はただの幼なじみに戻り、彼女に対しても普通の友情しか感じてはいないが、当時はそれを愛情と見紛ってしまうのも仕方がなかった。それほどふたりは親密であって、二人と存在しないことを知っていた。

昌美を含め、付き合ってきた彼女らのことを光宏はその都度心から大切に愛した。彼女らのほうも光宏を一番に愛してくれた。それぞれにいきさつがあって別れてしまったが、彼女らが特別でなかったとは思わない。今大切なのが絢子だとしても、それは比較にはならない次元の違う話だ。

絢子からの連絡を待っている間は、光宏のほうからは連絡をしないと決めていた。勝算はまるでなく、長期戦になることが予想された。それでも、彼はやはり焦っていた。

昌美からは様子を探るようなメールがたびたび届いた。

『今日、石川さんを見たわよ。元気そうだったけど、みっちゃん連絡してる？』

心配してくれているのか、嫉妬しているのか、おそらく後者なんだろうと光宏は思った。昌美の光宏に対する好意は、普通の幼なじみのそれを昔から常に超えている。あからさまに卑怯な手を使ったりしないかわりに、いつも光宏の様子を窺っていた。

昌美に応えることはもうないだろう。それは明白だった。頭の良い彼女のこと、最終的に事実を認めることができないだけで、そのことに気づいていないはずはなかった。

光宏が絢子と最後に会ったとき、まだ外気は肌寒く、彼女は帰り道、酔いもあってか頬を紅潮させていた。病院からの帰り、遠回りして歩く街灯の少ない通りの道すがら、空を見上げて彼は思い出していた。

あのとき、彼女は光宏に横顔しか見せなかった。うつむきもしないで、ただまっすぐに前を見つめていた。彼女の横顔の美しさは筆舌に尽くしがたいと彼は思った。

その横顔は、光宏が好きだったあの目をたたえていて、絢子が必死に守りたい何かに彼が踏み込んでしまったのだと知った。それが何であるのか、肝心のことが彼には判然としなかったが、誰も踏み

込めなかったその場所にいることで、彼は次の行動に出る勇気を得たのだ。

光宏は、夏の空を見上げながら彼女を思った。もうすっかり彼のことなど忘れてしまっているのであろう、絢子のことを。

## 濡れた髪の毛　1

電源を入れた携帯電話の液晶画面を見つめていくら待っても、刻々と過ぎていくデジタル表示の日付や時刻と、待ち受けフラッシュがひらひらと花びらを落としていく様子が見られるのみで、それらの他には――――着信を示すものも、受信メールを示すものも、何ひとつ現れはしなかった。

絢子は諦めて取扱説明書を読み始めた。携帯電話に触ること自体、十年ぶりのことである。他人から聞きかじった知識では正しい理解は望めないとばかりに、彼女は熱心にそれを読んだ。

彼女は分厚い取説を読むことに苦痛を感じない。むしろ、そうしたものがあることに安心感を覚えるタイプだ。ある意味においては融通がきかず、臨機応変に対応することを苦手にしている部分もあり、それと相反しているからなのか、マニュアル通りに寸分違わず物事を進めていく能力には非常に長けていた。

ただ、この少なからぬ応用力の欠如は現在の仕事でも問題を起こしていて、絢子が几帳面に行えば行うほど物事は進まなくなった。経験による応用がある程度利くのだから、いっそ経理職の専任となってしまえば良いのだろうが、あのような小さな会社の事情ではそうはいかない。

彼女自身、そうした欠点を当然承知で修正しようと努めてもいるが、事はそう簡単ではない。そうした彼女の穴を埋めていたのが件のパートの女性で、会社側が把握している以上に重要な役割を担っていた。そのことを日を追うごとに痛感しているのが絢子自身であったのだ。

絢子にはもう、この携帯電話くらいしか縋るものがなかった。兄に相談したくても、兄嫁にはなぜか疎まれていた。彼女には身に覚

えがなく、途方に暮れるしかない。
三十分をかけて取説を大まかに読み終えると、彼女は携帯電話を手に、まず会社の電話番号をメモリーに登録してみる。指図通りにうまくいくと、誰にともなく少し微笑んで、光宏が登録してあると言い残したメモリーを探し当てた。そこまでやると、携帯電話を一度閉じた。

光宏はこれを渡すだけ渡して連絡を寄こすつもりなどなかったのだろう。おそらく絢子が切羽詰まったところで連絡してくるのをゆっくり待っているのだ。そう考えると、絢子は自分が惨めになった。
誰に頼ることなく自分で立っていたと思っていた足場を外され、父親を亡くし、頼りたい兄を失い、孤立無援の中、よく知りもしない昔馴染みに連絡をして助けを求めようとしている。絢子は特別気位が高いわけではなかったが、自尊心くらいは持っていた。それすらもなくしてしまいそうな苦しさに、身の置き所がなかった。

じたばたと足掻いたところで、現状が変わる見込みはほぼないに等しい。がしかし、少なくとも彼は、絢子の話を真剣に聞く耳を持っている。足掻かずどん詰まりに追い込まれてしまうより、足掻いて恥を忍んで逃げ道を探したほうが得策だと絢子は知っている。以前これで大きな失敗をしているから、絢子は身にしみてわかっていた。

『石川さん』

「……はい」

彼は以前電話したときと同じように、ワンコールを待たずに電話に出て、絢子が名乗る前に彼女の名前を呼んだ。まるでかかってく

るのを知っていたかのようだ。電話越しに、救急車のサイレンの遠い音が聞こえてきて、それがわずかに彼の居場所を教えていた。

『今から会える？』

「……はい」

『じゃあ、これから車を回すから、その間に出かける準備をしておいて。十五分で行くから』

その後、光宏は絢子のアパートの住所を尋ねると、すぐに電話を切ってしまった。絢子はやはり途方に暮れていた。

時計は既に午後九時を回っていた。絢子はベッドの横に置かれた小さな鏡に向かってゆっくりと髪をとかし、簡単に化粧を直した。彼女は携帯電話を気にして何度も開いたり閉じたりを繰り返す。新しいおもちゃを手に入れたばかりの子供のようだ。

絢子が昔持っていた携帯電話には――それは絢子が隣町の女子高に通っていたころだから十年も前なのだが――カメラなどついてはいなかったし、折り畳めもしなかった。十年ぶりのそれを興味深く弄り倒している二十八の女は今時絢子くらいのものだろうが。

ピロロロ、ピロロロ、ピロロロ……

着信音に驚いて落としてしまった携帯をあわてて拾うと、絢子は電話に出た。

『石川さん』

「はい」

『着いたよ。アパートの前の路地には入れそうにないんで、手前の通りにいるから来てくれる？』

「はい」

光宏はきっと、このアパートを見ただろう。このぼろアパートを見て、彼はどう思っただろうか。若い女が住むようなところでないことは百も承知で住んでいる絢子に隠すつもりは毛頭なかったが、彼が何を考えたのかについては少なからず興味はあった。

## 濡れた髪の毛　2

備え付けのデジタル時計は午後九時三十二分を表示していた。絢子から電話があって車を出すことにしたタイミングで、空からぽつぽつと雨が落ち始めた。夏の暑さはまだ残っており、これは涼しい雨ではなく、湿度を上げ不快感を一層深めるような雨だとわかる。

目的のアパート近くに車を一時停止して、絢子を待った。程なく彼女は薄桃色の華奢な傘を差し、さすがにハイヒールではないものの、仕事帰りのようなきちんとした服装で後方から歩いてきた。

光宏が助手席のドアを手で開けてやると、彼女は手早く傘を畳んでからさっと雨のしずくを振り落として、静かにシートに身体を沈め、持っていた傘をさらに折り畳んで足元に置いた。一連の動作は流れるようで、彼はそれに見惚れた。

「じゃ、出すね」

「はい」

絢子の髪は細かな水滴が付着しており、湿って少しふわりと広がっているようだ。彼女は持っていたハンカチを髪に当てて水分を吸い取るが、膨らんでいた髪がぺたりとまっすぐに降りただけだった。絢子はそれを諦め、持っていた小ぶりなバッグにハンカチをしまった。

雨で濡れた髪の毛は、彼女をいつもより艶っぽく見せた。彼女は誰に対しても終始隙のない態度で接するようなところがあるのだが、この瞬間だけは、彼女は彼のものだった。この日の彼女は少し緩みがあり、付け入る隙もあった。

光宏は、行き先を決めていなかったために、それをどこにするかについて考えを巡らせていた。絢子の話をゆっくり聞けるところに行きたいと思ったが、車を運転する身では酒を飲むだけの場所へ行くわけにもいかず、この時間ではほとんど思い当たらなかった。彼自身明日も通常勤務で、彼女も当然仕事があり、遠くにはもちろん行けない。

ふと、彼は学生時代に世話になった、男の客ばかりいる小さな店のことを思い出す。仕方なく、彼はひとつだけ思い当たったその店で話を聞くことにした。

大通りから一本入った道沿いで見つけたコインパーキングの空いた場所に車を停め、そこから百メートルも歩かないところで光宏は足を止めた。ろくに看板も出ていない地下へ続く階段を下りていくと、後ろを歩いていた絢子もそれに続いた。

いささか狭苦しく感じるような階段は、人がすれ違うだけで精一杯だ。下りきったところで光宏はドアをゆっくりと開け、そのドアを押さえたまま、絢子に先に中へ入るよう促した。彼もその後に続いた。

ここは光宏が学生時代から通うなじみの店だ。十五人も入れば満員御礼となってしまう広さで、朝方まで営業している。表の素っ気なさとは違い、中はゆっくり寛げる空間になっており、そんなところも光宏は気に入っているのだが、何より学生時代は始発待ちで特に世話になった。仕事柄携帯の電波が届かないと困るため、地下にある電波の届きにくい場所には自然足が向かなくなっていたから、ここに来るのは久しぶりだ。

今日はウィークデーだが、既にほぼ席は埋まっていた。ちょうど

空いていた一番手前の、比較的電波の届きやすいテーブル席にふたりは陣取る。今日は時間帯のわりに比較的静かに飲む人が多いようで、ゆっくり話せそうだと光宏は安堵した。

「何か食べた？　ここ、食べ物もおいしいから、何でもいけるよ」

「何か食べようかな…」

絢子は少し考えると「牛すじの煮込み」とつぶやいた。既に十時を回っているが、よほどお腹が空いているのだろうと思った光宏は、合わせて他にも適当につまめるものを頼んだ。

絢子にと光宏が最初に頼んだビールがやってきて、先に来ていた彼の分の烏龍茶のグラスとビールのジョッキを合わせて乾杯をする。彼女は「わたしだけごめんね」と申し訳なさそうに謝りつつも、おいしそうに一気に喉の奥に流し込み、それから満足そうに微笑んだ。

カウンターに腰かけた若い男が、入って来たときから彼女をちらちらと見ているのに気づいていた光宏は、その男の視線を遮るように身体を彼女に近づけた。機嫌がいいのか、彼女からは何の反応もない。

そのうちに料理がいくつか運ばれてきて、絢子は目当ての牛すじの煮込みを箸でつまんで一口頬張ると、今度は満面の笑みを浮かべた。その場の男たちの多くがその笑顔に見惚れていたのに気づいていたのは、彼のほうだけであった。

「ここにはよく来るの？」

「学生時代はしょっちゅうね。始発まで待つのに都合がいいんだ。おかげで僕は途中までかなりの落ちこぼれだったんだ」

「楽しそうだわ」

絢子は、正直に話すかどうかを迷っていた。光宏のほうでも尋ねるタイミングを計っていたのだが、彼女がふとさみしそうな顔を覗かせたのを見て、口を開いた。

「僕は、石川さんのことを、たぶんきみが思ってるよりずっと知ってると思う」

「……」

彼女は答えなかった。その反応を見て、光宏は自分の持っているカードを切ることにした。

「石川さんのお母さんのお葬式のとき、もうひとりのお兄さんに会ったんだ」

絢子は驚いたように彼の顔を見つめた。今、光宏は「もうひとりの」と言ったのだ。それがすぐ上の兄の大輔のことではないのは確かだった。もうぬるくなってしまったビールを一口口に入れると、絢子は黙って聞こうと腹を決めた。光宏のほうでも、彼女の態度を見て、話を続けることにした。

## こぼれて乾いてく涙は、見ない振りに決めて　1

光宏が絢子の「兄」――ひとつ上の兄、大輔より十五も年長の――石川俊輔（いしかわしゅんすけ）に会ったのは、もう随分前のことだ。

彼が高校三年の夏のある日、それは残暑厳しい夏の夜のことだったのだが、石川家の当主のひとり娘が病気で死んだと、石川の家と付き合いの長い祖父から聞かされた。重ねた齢は四十二、長患いの末であった。

市原家としては光宏の父親が葬式にでるべきだったのだが、あいにくその父親が葬式の前夜に入って来た急患の対応に追われ、急遽その長男である光宏が出席することとなった。彼にとっては石川家は絢子の家という以外何の意味も持たなかったのだが、母親に言われるがまま、夏場はしないネクタイを締め、校則通りに制服を着て葬式に出たのだった。

葬式は石川家の自宅で行われた。当然のことながら、そこには絢子の姿もあった。絢子は通っている女子高の制服を着て、何の感情も見えない顔をして座っていた。光宏が焼香を終えて帰途に就こうと門から表に出たとき、ひとりの青年が彼を呼びとめた。それが俊輔だった。

「市原クリニックのご子息ですね」

俊輔は、光宏の目には二十代の半ばほどに映った。どことなく絢子の面影があるようだが、似ているとまでは言い難かった。

いやむしろ、石川家の当主であり、先ほど目にしたばかりの絢子

の祖父に似ており、相手を威圧するような鋭い瞳を持っていた。百七十二センチの光宏が見上げるような背の高さで、言葉は丁寧ではあるが、有無を言わさぬ声の強さが感じられた。

「はじめまして。石川俊輔と申します。私は絢子の兄のような者です。あなたと絢子は中学の同級生と聞いていますが」

立て板に水のごとく話す俊輔とは対照的に、光宏は「はあ」と気の抜けた返事をするばかりだった。何と返してよいのやら、光宏には気の利いた言葉も浮かばない。

大事な話なので、と促されてふたたび門の中へと戻る間じゅう、暑さからか緊張からかわからない嫌な汗が、光宏の首筋を幾筋も流れ伝った。

光宏が今身を置くこの部屋は、障子を開けると縁側に面した立派な中庭が見え、離れで一番奥まった場所にあった。客を通すような部屋ではなさそうだ、と光宏は考えた。葬式をしている母屋から棟続きになってはいるが、離れにあってはその気配はまったく感じられない。

絢子に兄がいるのは、昌美からであったのか、昔聞いたことはある。しかし、絢子の母親は四十二で、目の前のこの男は少なく見積もっても二十五は超えていそうである。しかも兄とは言わず「兄のような者」と名乗っている。ますます不可解だと彼は思った。

そんな光宏の胸の内を見透かすように、俊輔は自身について説明を始めた。

「私のことを兄と呼んでいるのは絢子と絢子の兄の大輔のふたりのみで、実際私は絢子から見ると大伯父の息子、つまり絢子の母親の従弟に当たります」

俊輔はそこまで言うと笑みを浮かべた。相変わらず何を考えているのか、光宏には見当もつかない。とそこへ、障子の向こう側から声がかかった。こちら側で俊輔が返事をし、その声に促されて静かに人が入って来た。どうやら使用人であるらしく、髪をひとつに結んだ中年の女だ。麦茶の入った透明なグラスを二つ、そちらとこちらに置いて、彼女はまた静かに出て行った。

俊輔に促されてそのグラスに口をつけると、それはよく冷えており、急にのどの渇きを覚えた光宏は一気にグラスを空けた。おかわりを勧められたが、光宏はそれを丁重に断った。

「本来であればあなたのお父様に直接お伝えしなければならないことです。今日お越しいただいたときにと考えておりましたので…不本意ではありますが、ご子息からお伝え願いたい」

先ほどからの柔らかい物言いとは違い、それは伝言の依頼というよりは強い警告のようだった。鋭くえぐるような眼差しで光宏を見つめたまま、俊輔は先を続けた。

「申し訳ないが、見合いの話はお断りしたいと。お気遣いはありがたいが、私には心に決めた者がおりますのでと」

「父があなたにお見合いを…」

「ええ。私も三十二になりますので、伯父――ああ、絢子の祖父のことですが…その伯父が私に良い相手をと望んで市原様にお願いしたのでしょう」

「そうなんですか…」

光宏には、三十二になる男に見合い相手を見繕うよう頼む絢子の祖父の気持ちもわからなければ、それを了承して相手を探して宛がおうとした自分の父親の気持ちもわからなかった。

しかし、俊輔がなぜ自分に伝言を頼むのか、そのことのほうがもっと解せなかった。確かに父親は忙しい人間だし、俊輔もおそらく同様に忙しいのだろう。ただ、他にも手段はあると思われた。したがって、彼は敢えて自分に伝言を聞かせようとしているのだ、と光宏は結論づけた。

「あの、非常に立ち入った話で、失礼なのは承知の上ですが」

光宏は、自分の出した結論の裏付けがほしくなって、思い切って俊輔にある質問をすることにした。

## こぼれて乾いてく涙は、見ない振りに決めて　2

これから尋ねようとする内容がわかっているかのように、俊輔はふたたび笑みを浮かべて先を促した。光宏はそれを見て一瞬怖気づいたが、ごくりと唾を飲み込み、思い直して質問を続けた。

「あなたが心に決めている人、というのは……」

それでも、光宏は最後まで尋ねることができなかった。言い終わる前に、俊輔の瞳の色がふたたび鋭く変わったのだ。

「ここだけの話、私は結婚をするつもりはありません。私が心に決めている者は私の気持ちを知りません。知らせることもありません」

「そうですか……本当に…不躾な質問をしてすみませんでした」

光宏はそう言って軽く頭を下げた。俊輔には何か事情があるようだと彼は思った。それを、よく知りもしない自分が明るいところに勝手に引きずり出して詮索しようとしたなど、不躾にも程があった。

ただ、彼がそう思うほどのことだと俊輔はとらえてはいないのか、今度は小さな笑みを浮かべてこう言った。

「誰にも話さないと約束してくれるなら――」

それは、よく考えれば不自然な提案だった。今日はじめて会った、たいした関係性もない、自分より遥かに若い目の前の少年を、俊輔は少なからず信頼するに足る者だと考えたのだ。

光宏は、この提案をどう受け止めていいのか迷ったが、拒否する理由も見つからず、いずれにしても話す相手もいないのだから――

と、無言で大きく肯いた。

光宏の祖父はあの二年後にこの世を去り、五年ほど前に石川の当時の当主であった絢子の祖父も亡くなったと聞く。石川と市原の家を密に繋ぐ者はもういない。

あの後俊輔が話したことを、光宏は絢子には言わなかった。いや、言えなかったのだ。

石川家の当主となったことを人の噂で聞いてはいたが、俊輔は今ごろどうしているのだろう――おそらく絢子が言うはずもないだろう、今の彼のことを、光宏は考えていた。

俊輔の話を聞いている間は、絢子は懐かしそうに柔らかく微笑んでいたのだが、光宏が今の俊輔について尋ねると、急に彼女は顔を強張らせた。それは今現在の俊輔が、彼女にとってどういう存在であるのかを表していた。

「市原くん、俊兄さんに会ってたの…」

彼女は涙ぐんでいた。酔いが回っているとしても、普段の絢子ではなかなかないような感情表現だ。光宏は、その潤んだ目が誰のためのものかを今知った。

「俊兄さん……ううん、俊輔さんとわたしは、はじめて会ったときから兄妹なんかじゃなかった」

既に、絢子が何を言おうとしているのか、光宏には想像がついて

いた。遮りたかったが、ようやく話し始めた彼女を止めることはできなかった。

絢子が俊輔にはじめて会ったのは、石川家にはじめて行った十歳の春だった。

石川家のひとり娘である絢子の母親は、後に絢子の父親となる男が婿養子になることで結婚を許されたのだが、絢子の祖父はこの結婚に納得してはいなかったという。

ふたりが結婚してから一年後に長男の大輔、その翌年には長女の絢子が産まれ、石川家は全体が幸せに包まれているはずだった。しかし、絢子が三歳の誕生日を迎える前に、両親はふたりの子供たちを連れて石川家を出て行ってしまう。

絢子の記憶には、石川家での産まれて二年あまりの生活は残っていない。物心ついて最初の記憶は、まったく縁者のない土地での親子四人での慎ましくも幸せな生活だった。

どんな事情があったのか、絢子には知る由もなかったが、絢子が十歳になった年の春から、年に一度、母親はふたりの子供たちを連れて必ず実家を訪れるようになった。彼女の父親は何くれと言い訳をして一緒には来なかったのだが、それが子供たちを傷つけないための父親の優しい嘘であることを、幼くても絢子は知っていた。

俊輔は母親の従弟で、はじめて会ったときには既に二十五になっていた。大人ばかりでつまらなそうにする兄妹を中庭に連れ出して遊んでくれたのが彼だった。毎年の訪問が苦痛でなかったのは彼のおかげだった。

絢子にとって俊輔は優しい兄のような存在で、彼女は「俊兄さん」と彼を呼ぶようになり、実の兄である大輔などよりよほど親しげにしており、小さな絢子が俊輔に宛てて手紙を書けば、彼の容姿と同じような流麗な文字で丁寧な返事が届いた。

なぜ彼がここにいるのか、何のためにいなければならないのかなど、子供の絢子には思いもつかないのだった。

絢子が十三歳になった冬の始め、母親は絢子と兄を連れて石川家に戻った。父親は、彼らを置いて出て行ってしまったのだ。

それからの母親は、元来の虚弱な体質が災いしてか、日一日と衰弱していくようだった。何日も寝込んでしまうことがあり、思春期に差し掛かった兄妹は父親を恨むようになっていた。

## こぼれて乾いてく涙は、見ない振りに決めて　3

そんな兄妹のささくれ立った気持ちを紛らわせてくれたのも俊輔だ。特に兄の大輔は、俊輔のことを兄というより父親のように慕っていた。

「俊兄さん」から「俊輔さん」に呼び方が変わっていったのはこのころだ。はじめ俊輔は、特に絢子からそう呼ばれることに抵抗を示していたのだが、次第に慣れたのか元のように穏やかに接してくれるようになった。

祖父が言うままに絢子が女子高に入って、およそ一年経ったころのことだ。毎日車で送り迎えをしてくれる俊輔が、どうしたことか、このようなときのために持たされている携帯電話にも連絡もないまま迎えに来ず、一時間ほど待ったところで絢子はひとり、電車で帰ることにした。

ここへやって来てからというもの、絢子たち母子三人は離れに住んでいたのだが、母親は治療のためと称して入院させられていた。そのまま戻ってくることもなかったのだが、そんなことになるとは知らず、絢子は兄とふたり、離れても母親を気遣いながら暮らしていた。

絢子が電車で帰ってきたときにも、母屋にもどこにも俊輔の姿はなかった。時刻はもう夕方になっていたのだが、仕事が忙しくていないのだろうと思った絢子は特に気に留めず、離れの自室で翌日の予習をすることにした。

夕食の時間になっても俊輔は帰宅せず、絢子はもやもやした気持ちで食事を残してしまった。こんなことははじめてで、彼女の心には動揺と戸惑いが広がっていた。

俊輔が帰って来たのは夜中の零時を過ぎたころで、忍び歩きをしながらも、絢子の部屋を訪れたことでわかったのだ。
既に部屋の明かりを消して床についてはいたのだが、絢子はまだ眠ってはいなかった。月明かりのおかげで障子の向こうに俊輔の影が見えるのに気づいて、急いで布団を抜け出し、絢子は障子を――それでも静かに開けた。
俊輔は和装だった。彼は絢子が起きていたことに驚いた様子だが、彼女のほうはそれどころではない。ひどく心配で、心配しすぎたあまり、胃が痛むほどだったのだから。

「俊兄さん！」

絢子は、子供のころのように無邪気に安堵して俊輔の胸に飛び込んだはずであった。一瞬彼は驚いたが、彼女のその柔らかい身体を両腕でおそるおそる抱き留めた。その瞬間、花のような懐かしさを呼び起こす香りが漂い、それはぐらりと彼の身体を揺さぶった。その香りは彼の胸に頬を当てた腕の中の彼女が最近まとっているもので、覚えのあるそれに誘われるようにして彼はその腕にそっと力を込めた。
そうされることは彼女にとっては随分と久し振りのことで――最初は戸惑いもあったのだが――昔とは異なる甘い心地のする抱擁に、しばらくの間呆けていた。俊輔の着物からは白檀の香りがして、いつもと違うその香りは一層この現実感の薄さを感じさせた。

一時してはっと我に返ったとき、この気持ちの正体が何であるか、絢子は考えてしまうのが恐ろしくなって急いで身体を離した。俊輔のほうも抱き締めていた腕を持て余し、そして己の行動を思い出してうろたえた。
しかしふたりは、身体を離した後も視線をそらすことができなかった。月明かりがふたりを照らし、障子には二つの影が映っていた。

俊輔は絢子の潤んだ瞳に情欲をそそられた。ますます母親に似て大人びてきた絢子を見ても、妹のような存在なのだと、あれほど自分に言い聞かせ続けたはずであったのに、そんな理性は一瞬にして消え去ろうとしていた。そのことに彼は恐怖し、急いでそこに蓋をした。

「もう寝なさい」

俊輔が命からがらかろうじて発した言葉はまるで父親のそれで、絢子の心はずきずきと痛み、彼女の目からは一粒の涙がこぼれた。言葉とは裏腹に視線は絡み合ったままで、蓋をしたはずの情欲は彼の許しを得ずに何度でもあふれ出ようとした。しかし、彼女の目からこぼれて乾いていく恋情の涙は、見ない振りに決めていた。

「俊輔さん…」

どうか、わたしの心まで見ない振りをしないで———。

俊輔が葛藤する様を目の前ではじめて見て、絢子はお互いの思いが、形は違えども同じであったと確信をした。彼女は、彼にはじめて会ったときから、そうとは知らずに淡い思いを抱き続け、今この瞬間にそれが恋だと知ったのだ。

それでも、彼は彼女を突き放した。それが彼に今できる精一杯の愛情であることに彼女が気づくはずもなく、ふたりはどちらからともなく視線を外した。

## 殺めるなら優しく優しく、　1

「わたしたちは…きっと出会ってはいけなかったのね……」

絢子は静かにつぶやく。そこには感情のかけらも見出せず、既に何もかも絞り尽くされたかすのようだ。先ほどまで潤ませていたはずの瞳は、もう何も映してはいなかった。

「わたしが今こうして孤独なのも、きっと神様に罰せられているからだって思うの」

絢子が子供のころ、臆病な母親は彼女に悪いことをすれば必ず罰が当たるとくどいほど言い聞かせた。母親は身に染みてそれを感じていたから出た言葉であったのだろうし、子供に与える言葉としては、それは決して間違っているものではなかったのだが、残念ながら彼女にとってそれはどんなに努力しても克服できない壁となってしまった。

「俊輔さんだけは幸せでいてほしいと思うのに、あの人は自分で十字架を背負うの」

そういう人なの――――とひとりごとのようにつぶやいて、絢子は両手で顔を覆った。彼女の手はその美しい顔に似合わぬもので、まさに働く人間の手そのものだった。

光宏は彼女に掛ける言葉が見つからず、何か少しでも彼女のためにできると信じていた過去の自分を少しだけ恥じた。しかし、どうしてもこの小さな手を守りたい思いは消すことができそうもなかった。

「石川さんは幸せになっちゃいけないのかな」

光宏が投げかけた言葉で、弾かれたように覆った手を外し、絢子はきっぱりと言った。

「ううん、そうじゃない。わたしはきっと罰せられているから、どう足掻いても幸せからはこぼれ落ちてしまうわ」

それでも足掻いてしまう、それが絢子だ。諦めきれないあの強くて厳しい瞳が、遠い昔からそう物語っていた。

「僕はね、石川さん」

光宏は一思いに言ってしまうことにした。

「何をしても幸せになれない人なんていないと思う。タイミングとか、組み合わせとか、場所とか時間とか、そういうのがうまくかみ合わなくてすれ違って一時的に不幸になることはあると思うけど」

絢子が一番望んでいるものが手に入ることはない。しかしながら彼は、真剣に聞こうとしてくれる彼女を、誠実にまっすぐ見つめて続けた。

「僕は中学のとき、ずっと石川さんを見ていた。きみのことが好きだった。春に再会したときは、運命だと思ったくらい――ずっと、どうしても忘れることができなかったんだ」

「……ありがとう」

絢子は頬を赤らめて少しうつむいたまま、光宏にお礼を言った。

「お礼を言われたいわけじゃない。きみが僕を何とも思わなくても、たとえずっと『彼』を忘れられなくても、そんなの全然構わないんだ」

「わたしは構うわ」

「僕はきみのためにたいしたことができるとは思ってない。ただ、きみは携帯を受け取って電話をくれた。こうして会うことを了承してくれて話もしてる。強引だったかもしれないけど、きみのほうも何かが引っかかってるんだろう？」

光宏に何か確信があったわけではない。しかしそう問われて絢子はひとつ溜息をつき、幾度か瞬きをしてからゆっくりと口を開いた。

「そうかもしれない。抗えない何かがあって、わたしはそれに逆らえない。本当は言うつもりがないことまで話してしまう。暗示にかかっているようでとても恐ろしいのに、それでも聞いてほしくて仕方がないの」

「きみが――石川さんが望めば、だけど」

「何？」

「こうしてときどき会ったりできないかな」

何が来るかと身構えていた絢子は肩透かしをくらった気持ちであった。そのくらいのことなら何も問題なんて――そう言いかけて、彼女は口をつぐんだ。妹尾昌美のことが彼女の脳裏をすっと過ぎる。

「妹尾さんは…」

恐る恐る尋ねてみるが、光宏は即答だった。

「ただの幼なじみだよ。過去に何もなかったとは言わないけど、今現在は僕は誰とも付き合ってないし、そんな気もない」

「そういうことじゃなくて…」

では何なのか、ということを絢子はうまく伝えられそうになかった。目の前にいる光宏のことを恋愛対象として見られるようになるとはとても思えなかった。第一、彼女はほとんど恋愛経験がない。過去も現在もただひとりしか見えていない絢子に、これ以上何が言えるだろう。

「とにかく、石川さんが話したくなったら僕を呼べばいい。いつでもどこにでもとカッコよくはいかないけど、できる限り時間は作るし、作りたい」

いつも穏やかな光宏の表情が、一瞬だけ変わる。これだわ――絢子は思った。あの、昔見つめられていたときの、狂おしいまでに激しい感情をたたえた瞳の色。

「付き合ってくれとか、そういうことを言うつもりはないんだ。ただ――石川さんに幸せでいてほしいだけなんだ」

光宏にも邪な気持ちがないわけではなかった。それでも、それ以上に絢子の幸せを願う気持ちは強くあった。

彼女はまだ多くのことを心に抱えているのだろうことは彼にも薄々わかっていたが、それでも彼女の傍に近寄る権利を放棄するつも

りはなかった。

## 殺めるなら優しく優しく、　2

翌日、絢子は昨晩のことを後悔していた。話してはいけなかった、会ってはいけなかった、連絡してはいけなかった――そもそも、携帯を受け取ってはいけなかったのだ、と彼女は自分を責めた。

ただ、不思議なことに、彼に話をしたことで重石が取れたように昨晩は久しぶりにゆっくりと眠れた。そう言えば、昨夜は食欲もあった。

光宏が嘘をついているとは思わない。しかし、彼がなぜこれほどまでに自分にこだわるのか、彼女には理解し難いものがある。

彼のほうにどんな理由があるにしても――――普通の女であれば、彼の提案にやすやすと乗り、彼の好意を素直に受け取るのかもしれなかった。それができるのなら今の絢子はなかったはずで、そう考えると彼女の気持ちはますます曇っていった。

光宏に話していないことは、まだいくつも、ある。だが、近いうちにそれらを絢子は彼に話してしまうだろう。彼は真摯に耳を傾け、これまでのようにいとも簡単に自分の中へと飲み込んでしまうのだろう。そうして、まるで記憶の共有ができるかのごとく、彼は少しずつ彼女の心に踏み込んでいるのだ。

彼女は他人に立ち入られたくないとずっと思っていた。それなのに、彼にどうしても話したい、彼にすべて聞いてほしいという自分から沸き起こる欲求に抗うことができず、絢子は昨日とは違う意味で途方に暮れていた。

彼女が敢えて触れずに話す部分はある。父親であり、母親であり、祖父であり、俊輔だ。俊輔との間に何があってどうなってしまったのか、そして今どうなっているのか、絢子はそれらを彼に話す勇気

がなかった。

勇気？　いや、違う。

永遠に終われなくて、本当は苦しんでいるところを見られたくないだけ――――。

昨日、光宏に俊輔への恋心をつい吐露してしまったとき、絢子はいつもの冷静さを欠いていた。まるで俊輔に伝えるかのように、光宏に向かって話していた。彼には彼女にそうさせる強い何かがあった。

一度だけ、恋をした。あれはまさに落ちた瞬間だったと絢子は思う。

十六歳のあの日から、絢子は俊輔に恋をしていた。それから何年も彼女は彼を思い続けた。ふたりが一緒にいられたのはほんのわずかな時間で、思いを伝え合ったことは一度もない。きっと、これからもない。

何のために働くのか、誰のために生きるのか、彼女は考えてはいけなかった。考えてしまえば結論が出てしまう。彼女は彼のために生きている。それが彼のためにならないのだとしても。

俊輔の心の隅には今でも、自分が未だ棲みついているのだろうと絢子は確信している。そしてこれからも――彼が妻子を持とうとも――その場所を他の者に明け渡すことは、もう二度とないのだろうことも知っていた。

それは絢子が、俊輔にゆるゆると時間をかけて殺められているのに違いなかった。一方では彼の心の欠片でも自分のものなのだと感じられもするのだが、他方では泥深い沼の中でもがいているようで

もある。
どうせ殺められるのなら、それは俊輔によってであってほしいと彼女は願う。彼であればきっと優しく、これ以上なく優しく殺めてくれるだろう。

とにかく明日にでも電話して、はっきりと彼に断らなくては――――そう決意した絢子は、前の夜と同じようにその夜もぐっすりと眠った。

その翌朝、絢子は普段通り午前六時に起床した。一昨日、昨日とぐっすりと眠れたおかげで、頭も身体も軽くなっていた。あれほど追いつめられたように煮詰まっていた仕事も、昨日は驚くほど順調に進んだ。
いつものように起きぬけにシャワーを浴び、簡単な朝食を作って食事をとる。古いオーディオから流れるラジオを聴きながら、最後に紅茶を入れて、買ったばかりのノートパソコンでインターネットのニュースサイトを見る。
買おうと思っていたパソコンは、結局ノートパソコンにした。自宅で使うなら少しでも画面が大きいほうがいいのだが、この部屋は狭くて置き場所もないから移動できるものがいい。絢子はそう考えた挙句、ノートパソコンを買ったのだ。型落ちのおかげでかなり安く購入できた。
今日は一日晴天という予報を確認してパソコンの電源を落とした。あとは着替えて化粧をして出かけるだけ――その前に、絢子は携帯電話で光宏にメールを打った。

## よく分からないひと　1

絢子をアパートに送り届けた後、光宏はそのままマンションには戻らず、しばらく車を走らせた。車を運転するために酒を控えたのに、まるで酔っているかのように頭はぐらぐらと揺れていた。

絢子が話した内容にたいした驚きはなかった。予想通りというほどいろいろわかっているわけではないが、大筋は外していなかった。彼女はおそらく嘘をついていないだろうから、彼女の一番近い場所に入れてもらえるのはきっと今は光宏だけだ。

それでも光宏の気持ちは晴れなかった。それは、絢子の背負う荷物の中で一番大きなものの存在が見えてきたせいなのか、彼女と話していると光宏自身がひどく卑小に思えるせいなのか、いずれにしても理由は彼にもわからない。

カーオーディオからはＮａｔ　Ｋｉｎｇ　Ｃｏｌｅの甘い歌声が流れている。今ちょうど流れているのはＷｈｅｎ　Ｉ　Ｆａｌｌ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅという曲だ。

光宏は絢子のことを考える――彼女が恋に落ちたときのことを。彼女がいくら『彼』を思っていたとしても、きっと報われることはない。このまま永遠に続く恋なのだとしても、彼女が今でもそれを望んでいるのかはわからない。

絢子はその恋から逃れることが許されないでいる。逃れたいのかどうかを考えられないほどに囚われて、命を削って生きている。きっとあの目はそういうことなのだ。

そして、きっと『彼』のほうでも彼女の不幸は願わない。おそら

くは『彼』が悪いわけでもないのだろう――たった一度顔を合わせただけだったが、光宏は俊輔の人間性に一定の信頼を寄せていた。
俊輔と彼女の間に何があったのか、もっと隠された何かがまだあるのか、どんなに考えても光宏にはわからなかった。

――――俊輔さんには、不可解なことが多すぎる。

ただ、誰かが波を起こさなくてはいけないのだとすれば、たとえ絢子に恨まれたとしても、それは自分でありたいと光宏は願った。自分が彼女を救えるとは思わないが、彼女を救いたいと思うことは自由なはずだ。

携帯の着信ランプに気づいたのは翌日の午後九時を過ぎたころで、仕事の帰りだった。光宏は早朝からこの時間まで働き、やっと解放されて電源を入れる。こんな生活をしていることは周知のことだったから、家族も友人も急がない連絡しかしてこない。
着信は二件の受信メールを知らせるもので、うち一件は昌美から、もう一件は絢子からだった。昌美からは様子伺いだろうと予想し、絢子からのメールをまず開く。

『おはよう。石川です。突然ですが、お願いがあります。近いうちに少し時間をいただけませんか。宜しくお願いします』

絢子と会えることはうれしかったが、こういう内容が結果も良いとは限らない。むしろ彼女が誘ってくるということは――光宏は悪い想像ばかりを思い浮かべていた。
昌美からのメールのことはすっかり忘れてしまった彼は、それを見ないまま携帯電話をポケットにしまった。そして、空を見上げて

歩きながら、彼は絢子のことを考える。それは、既に彼女のことを思うときの癖になっていた。

玄関のドアを内側から施錠して、明かりをつけずに廊下を歩いてリビングまで行く。窓からは月明かりが差し込んでいて、カーテンを引いていないとそこは明るい。

きっと絢子は今ごろ、残業から帰ってひとりで食事をしているのだろう。彼女がひとりで食事をするのはちっともさみしそうではなかったが、光宏は隣にいてやりたいと思った。彼女がこれから自分に恋しないとしても、彼はその思いのすべてを捧げたいと強く思った。

## よく分からないひと　2

昨夜光宏から届いたメールには、絢子は少しも驚きはしなかった。彼らしい、自分が思った通りの反応だと、彼女が感心するほどだった。

『僕の予定の中から石川さんの都合の良い日を選んで。ぜったいとは確約できないけど、なんとかするから』

きっと光宏は絢子の真意を見透かしていて、それでもこの誘いに乗ってくれようとするのだ。それは気づまりというほどではなかったが、自分の中の何かを奪われていくようで、絢子は戸惑っていた。

それで、わたしは何を言うつもりなのか――――。

もう放っておいて、と言えばそれで絢子の気が済むわけではない。食欲が戻ったことも、不眠が解消されたことも、現状が何も変わらなくても仕事が捗ったことも、何もかもすべてわかっていた。もう逃れられないところまできているのに、それでも彼女は認めたくなかったのだ。

会って何になるのか、話して何になるのか、今までは良くてもこれからどうなるのか、それは絢子にもわからなかった。きっと光宏にもわからないのだ。それでも、会って、話せるすべてを話したいと思ったのは彼だけだ。

絢子は、通勤用のＡ４サイズの皮のトートバッグから手帳を取り出した。大学を卒業したときに父親から贈られたシステム手帳だ。

あのとき彼は、「今時の女の子はこんなもの使わないかもしれな

いが」と言った。思春期に何年も離れて暮らし、大学を卒業する前にふたたび一緒に暮らすようになった。絢子は業界で中堅と言われる会社に入り、経理として懸命に働いた。慎ましくも幸せだった五年の日々を思い出して、絢子は少し感傷的な気持ちになった。

兄の大輔から事実を知らされるまで、絢子も大輔も、父親を憎んでいたと言っていい。もしもふたりとも知ることがなければ、そのまま憎み続けたのだろうと思うと、絢子の背中に悪寒が走ったような気がした。それまでの思い違いのすべてをぶつけたいと願った、その相手ももう既にいない。

ふと我に返って、手にした手帳をめくって予定を見る。光宏が指定したいくつかの日のうち、自分の予定と合っている日を見つけて、絢子はそこに丸を書きこんだ。そして、それを伝えるために、彼にメールを送った。

昌美は焦れていた。メールを送ってから丸一日、何の反応もないことに明らかに落胆していた。端から期待していないのにも拘らず、彼女は彼に苛立っていた。自分の反応がおかしいことは百も承知だ。

その一方で、彼女の両親が言いたいこともわかってはいる。昌美の恋がまったく先のないものであることは、説明するまでもなく彼らは知っており、心情的には確かに理解できるものではある。

一昨日、昌美の母は釣書を持ってきた。今年で二十八、いつまでも光宏を諦める気配のない娘に焦れての行動だというのは昌美にもわかる。渡されるまま受け取りはしたが、開くこともせず、そうかといって断るでもないまま、昌美は光宏にメールだけをして待ったのだ。

昌美には、お見合いを受けるつもりなどこれっぽっちもない。ただ、こういう事実があることを、光宏に知らせたかっただけだった。彼が引き止めてくれるはずなどないのに、心の片隅ではそれを待っていたのは事実だ。だから落胆し、苛立ちを隠せなかった。

このままでは蛇の生殺しだと昌美は思うのだが、あるいは心のどこかで――彼女は認めたくはないのだが――もう引導を渡してほしいと願っている気持ちがあったのかもしれなかった。

翌日になっても、昌美の元にはメールは届かなかった。もう一度彼に送ることは、どうしても怖くてできなかった。光宏は、無反応でいることで自分にわからせようとしているのかもしれないとすら思えてくる。

この、どこまで行っても行き着くところのない恋を、誰かにどうにかしてほしいと、確かに彼女は思っている。これをどうにかできる誰かがいるのだとすれば、光宏ではないのだろうことは彼女にもわかっていた。

このままでは、生きながら死んでいくのと同じ――――そう思っても、どうしても最後の一歩が踏み出せないまま、昌美は携帯電話の液晶画面を凝視していた。

十分ほどそうしていただろうか、突然携帯が手の中で震えた。彼女は彼ではないことを目で確認すると、そのまま携帯をテーブルに投げ出して放置することにした。

きっと自分は試されているのだろうと思い、昌美は明日メールしようと考えていた。

## よく分からないひと　3

『え？　メール？　ああ、そういえば見てないな。ん？　いや、別にわざとじゃないよ。ちょっと他のメールに気を取られててさ……』

メールをして返信をふたたび待つということに耐え切れそうもないと考えた昌美は、翌日の夜、直接光宏に電話をした。彼の実家は彼女の家のすぐ近くだが、彼は既にそこには住んでいない。これほど親密であるにも拘らず、これまで彼女は彼の部屋に一度も案内されたことがなかった。

「他のメールって？　石川さん……とか…？」

『えっ？　あ、んー…まあそうかな…』

鎌をかけるほどでもない。光宏はあっさりと認めてしまった。確かに、絢子と会わせたのは、他でもない昌美自身である。それなのに、そのことが昌美は今更ながら口惜しくてならなかった。

彼は絢子に会ってから、明らかに以前と変わった。彼と彼女が同じ空間にいたのはもう十年以上も前のことで、期間はたった二年余り、しかも彼は彼女と友達ではなく、接点すらなかったように見えた。高校に入ってからの光宏は、絢子のことなど忘れてしまったかのようだった。

――――それなのにそれなのにそれなのに。

結局メールの内容については言えないまま、昌美は電話を切った。そして、見たくもないと言わんばかりに携帯の電源を落とし、それを床に放り投げた。それから、彼女はベッドに身体を投げ出し、仰

向けになったままで天井を見つめた。

昌美から見た中学時代の絢子は、いつも凛として見えた。誰も寄せつけないようでいて、直接関わればその印象を一変させるほど穏やかで、簡単に親しみを覚えさせた。彼女をやっかむような者は皆、直接接したことがない者ばかりだった。しかし、彼女には友達と呼べそうな者は不思議といなかった。

彼女は寡黙で、余計なことは一切喋らなかった。その一方で、きちんと言うべきことはためらわなかった。おとなしいのとは違う。その年頃の女の子たちとは、明らかに一線を画していた。おそらくはそれが、彼女とごく親しくなるためには障害になっていたのかもしれない。

一年の終わりに絢子が転校してきて、まだ日も経たないうちから光宏が彼女を見ていたのを昌美は知っている。昌美は当時テニス部に所属していて、テニスコートからは光宏のいるサッカー部の練習するグラウンドがよく見えた。同じグラウンドを分け合うようにして練習していた陸上部もまた、よく見えたのだ。

絢子は中学生にしては外見も大人びていて、その外見は男女を問わず、また上級生下級生の別なく、卒業するまでずっと注目の的だった。直接彼女に声をかける勇気がない者が多いのか、光宏のように外野から見つめている者も少なくなかった。

彼女は誰からの誘いも受けていないようだった。断るときにはまずは丁寧にお礼を言い、それから理由を言わずに謝るのだと昌美は噂で聞いていた。

――あの頃、石川さんには好きな人がいたのかな……。

昌美にとって絢子は本当によくわからない存在だった。学校以外

での彼女のことはほとんど知らない。母親が病気がちで一緒に実家に戻って来たということ、だから転校することになったのだということ、家は名の通った旧家だということ、上に兄がいること、兄は別の私立中学に通っているのだということ――どれも噂でしかなく、直接彼女に確かめた者はいないようだった。

## よく分からないひと　4

わからないことがありすぎた。だからこそ、絢子は不可侵な存在として超然としていられたのかもしれない。中学生には踏み込めないような何かを、あの頃の彼女は纏っていた。

絢子は昌美とは対極にいるような存在だ。一度は昌美と付き合った光宏も、結局は絢子を忘れることができなかった。絢子は携帯を持っていないと言っていたが、光宏のために携帯を買ったのかもしれない。ふたりがいつの間にかメールを送り合うような親しい仲になっていることを知って、昌美は更に苛立った。

昌美は自分が彼女のことを知らなすぎることに不安を覚えた。どちらにせよ、光宏は絢子のことをぺらぺらと話すとは思えない。であるなら、答えはひとつしかない。

週末は予報通り雨になった。ラジオでは台風が近づいているのだと報じていた。絢子は休みの日も規則正しく生活する人間だが、この雨を見るとさすがに出かけるのが億劫になった。

雨は台風を思わせるように横殴りで降っていた。ラジオではしきりに交通情報を伝え、『情報の移り変わりに十分にご注意ください』と繰り返し流れてくる。絢子はひとつ溜息をつくと、仕方なく出かける準備を始めた。

まるでこれから起こることを予告しているようだ、と絢子は思った。これから会う相手と自分がいったい何を話せばいいのか、彼女は戸惑うしかなかった。

相手が絢子に聞きたいであろうことは想像がついている。しかし、それだって何と伝えればいいのか。ただ話がしたいから会っているだけで、恋愛感情はない――――そう言えば納得してもらえるのか。納得してもらえないとしても、絢子にはそれしか伝えられることがなく、選択の余地はない。

絢子が昌美からの電話を受けたのは一昨日の夜のことだ。

『石川さん、明後日会えないかな？』

突然だった。突然自宅の電話にかかってきて、突然会いたいと言われた。

「構わないけど…」

絢子は曖昧にしか答えられなかった。何か言いたいことがあるのか、聞きたいことがあるのか、そう問えば逆に問い返されたときに絢子自身が困るのだ。

『じゃあ、駅前の喫茶店で。一時くらいでいいかな？』

「わかったわ」

電話が終わって受話器を置くと、絢子は入っていた力が一気に抜けた。それと同時に、こめかみがじんじんと痛んだ。寄せていた眉間が弛緩して楽になる。どうやら電話中ずっとしかめっ面をしていたようだ。

結局、昌美と会うことになった。昌美は何も理由を言わなかったし、絢子のほうも聞くことはできなかった。ただ、何のために会う

のか、それだけがお互いにわかっていることのすべてだった。

指定された駅前の喫茶店は、開店休業状態だ。台風が近づいてくるというのに、普通は呑気にお茶などしてはいられない。それでも常連客らしき中年の男性がひとり、カウンターに腰かけて、中にいる店主に何やら話しかけていた。

絢子が店に入ったときには既に昌美はそこにいた。定型の挨拶と、「こんな日に出向いてもらってごめんね」という謝罪の言葉をもらって、絢子は恐縮していた。

ちょうどそこまで話したところで、カウンターにいた店主が注文を取りに来た。ふたりとも紅茶を注文し、昌美はアイスで、と付け加えた。

「単刀直入に言うんだけど――」

絢子は身構えた。

「みっちゃんと…その、付き合っているのかなって……」

予想外にわかりやすい質問で、絢子はほっとして少し笑顔を見せた。昌美はそれを見て顔を強張らせた。

「誤解よ。付き合ってなんかいないわ」

「でも、みっちゃんはきっと…」

「わたしは誰のことも好きにはならないわ」

好きにはなれない、の間違いだ――心の中でそう呟きながら、絢子は自嘲気味に微笑んだ。

絢子は誰がどう見ても美しい顔をしていた。昌美が見ても惚れ惚れとするほどだった。特別な努力を何も必要としない、生来の美人だ。

「じゃあ……もう、みっちゃんに会わないで」

昌美は今にも泣きそうな顔をして懇願した。

## よく分からないひと　5

お互いに黙ったままで数分過ぎた頃、頼んだ飲み物が運ばれてきた。昌美はグラスにガムシロップをたっぷりと入れ、ストローをさすと一気に半分ほどを飲み干した。

絢子はその様子を何とはなしに見ていたが、程なく自分の注文した紅茶のカップに砂糖を一匙すくって入れ、スプーンでぐるぐるとかき混ぜた。十分にかき混ぜて溶けてしまった後でも、しつこいほどにカチャカチャと音を立ててかき混ぜていた。そして、ようやくカップを持ち上げて口をつけた。

やがておもむろに絢子が口を開いた。

「わたしは…なにも約束はできないの……」

それは昌美にとっては死亡宣告に近いものだった。絢子がその気なら勝ち目はない。彼女がすがろうとした糸は目の前で切られてしまった。

「市原くんが好きだとか、そういうんじゃないの。ぜんぜん違うの。友達ってほど親しいわけでもないし…うまく説明できないけど…どうしても彼に話したいことがあって、それで――」

絢子は自分でもわからないこの気持ちを、それでも誠実に言葉を重ねて伝えようとした。しかし、恋愛感情でもなく友情でもない何かの存在を昌美が肯定するわけもなかった。みるみるうちに、昌美の顔は興奮で紅潮していく。

「わかんないよ！　石川さんってホントに昔っからわかんない！」

「……妹尾さん……」

「いつでも澄ました顔して、わたしは関係ないみたいな顔をして。知ってたくせに…今だって、わかってるくせに、気を持たせるようなことして、惑わせて」

「そんな…」

「だって、そうじゃない。みっちゃんはずっと石川さんが好きだった。たぶん、今まで付き合った誰よりも石川さんのことが好きなんだよ。そういう気持ち、考えたことある？」

昌美の言うことは正論だ。絢子は現状では確かに光宏を利用しているに過ぎない。彼が納得ずくだとしても、それでも昌美の言うことは正しい。そう思っても、絢子は心が煮えそうになった。

「もう会わないって、今度会ったら伝えようとは思ってるわ。でも、申し訳ないけど…この話をこれ以上、妹尾さんとはしたくないの…」

絢子は「ごめんなさい」と謝罪を繰り返した。それは彼女にとっては精一杯のことで、これ以上えぐられれば逃げるしかなくなってしまう。そこまで追い詰められていた。

そんな絢子を見ているうちに、昌美のほうの顔には羞恥が浮かんできた。絢子を問い詰めたところで光宏が心変わりするわけでもなく、一層遠くに行ってしまうかもしれないと思い当たったのだった。

「わたしのほうこそ、ひどいこと言ってごめんなさい」

昌美はそう言って頭を下げた。絢子は驚いて「そんなことしないで」と言ったが、昌美は自分の醜い心と向き合った途端に顔が上げ

られなくなってしまっていた。

医療の業界というものには繁忙期というのは存在しないのだろうか。絢子の勤める会社の扱う製品が緊急性を伴わないせいもあるのか、業界特有の繁忙期というのは特になかった。夏が終わりを告げ、涼しい秋風が吹くようになっても、忙しさに概ね変わりはなかった。

その日は一日外出することもなくデスクワークをした。お昼は持参した弁当を自分のデスクで食べた。朝から問い合わせの電話を受け、得意先に納期の連絡をして、溜まった伝票の整理をして一日を過ごした。

あれから昌美とはすぐに別れた。誘った自分が払うと昌美は言い張り、結局喫茶店では彼女が支払いをした。絢子は簡単にお礼を言い、昌美は軽くこくりと肯いた。

絢子は、昌美に会ったときから、自分のしていることと改めて向き合うことになった。ひとりでは解決するどころか直視すらできない絢子自身の問題を、光宏と分かち合うことについてだ。彼について考えることは、つまり彼が自分の中に踏み込んでくることに他ならず、絢子にとっては苦痛を伴うものだった。

それでもきっとそうしなければならないのだ。絢子はあのときの昌美の顔を思い出し、続いて光宏の温和な顔に似つかわしくない強い眼差しを思った。

## 見せたくない過去も暴きたくて仕方がないくらい　1

時間をくれというメールをしてから、かれこれ一ヶ月が過ぎようとしていた。そして、約束はようやく果たされようとしている。

光宏の事情で、あれから二度延期になった。仕事が仕事なのだから致し方ないとは思いながらも、絢子は決心が鈍らないように、そう強く自分に言い聞かせながら日一日を過ごしていた。

そんな彼女を置いて、木々はその葉を秋の色に染めていく。

先週の金曜日の夜、兄の大輔が絢子のアパートを訪ねてきた。大輔がこの部屋を訪れるのは、彼女がここに越してきてからおそらくはじめてのことだ。義姉によく思われていない妹を直接訪ねるのは余程のことなのだろうと絢子は思った。

大輔は絢子と違い楽天的な性格で、悪く言えば行き当たりばったりとも思えるところがあった。それは決して他人に不快感を与えるものではなく、相手を和ませたりする類いのものだ。事実、彼が結婚して家を出るまでは、絢子も彼のその明るさに救われていた。

古いアパートの狭苦しい部屋の中で、大柄な大輔はすこぶる居心地悪そうにしている。絢子は兄の好きなコーヒーを淹れようと思い、小さなキッチンに立っていた。

コーヒーを入れたカップを小さなお盆に載せて振り向くと、小さな卓袱台の脇の、ひとつだけ用意してある来客用の座布団の上で、大輔は真面目な顔をして座っていた。

「兄さん、コーヒー入ったわ」

「あ、すまん。悪いな、突然来て」

大輔はそう言うと、カップの脇に置かれた古めかしいつくりの砂糖入れの蓋を開けて、砂糖を二匙すくって入れた。そして、スプーンで三回ほどかき混ぜると、カップを傾けてごくりと一口飲み、うまそうにこくこくと肯いた。彼は甘党なのだが、コーヒーに入れる砂糖以外の混ぜものを嫌悪している。

「俺がここに来たこと、由美子（ゆみこ）には内緒な」

「うん」

由美子、というのは大輔の妻で、絢子のことを嫌悪している義姉だ。彼女に内緒だということは、おそらく身内の話なのだろうと絢子は思った。

「悪いな。とりあえず、俊兄から伝言頼まれた」

「……っ」

思いがけない人の名前を聞いて、絢子は動揺して、思わずごくりと唾を飲み込んだ。大輔は俊輔と絢子の間にあったことを知らないはずだ。

「幸せになれってさ。そう言えばわかるって言われたんだけど、絢子、おまえわかる？」

「……うん…わかる……」

俊輔がなぜ今それを言いたいのかは、絢子にもわからない。俊輔

なしで絢子が幸せになれるとは彼女には思えないのだが、それでもいつまでもひとりでいる彼女のことをこうして気にかけてくれているのは確かなのだろう。
ただ、絢子はそれが切なくて苦しかった。彼にこそ幸せになってもらいたいというのに、伝言すらも受け取らない彼に、それをどうやって伝えればいいのか彼女にはわからない。

「そうか。ならよかった。なあ、これ、このコーヒーうまいな。どこで買ってんの？」

大輔は相変わらず昔のままだ。言わないと決めて口をつぐんでいることを無理に言わせようとはしない。

「あ……うん、豆は安物。スーパーで安売りするときにまとめて買うの」

「ふうん。じゃ、ちゃんとサイフォンで淹れたからうまいのか」

そうかそうかと肯きながら、大輔はもう一口、コーヒーを口に入れる。やっぱりうまいな、とつぶやくと、残りをうまそうに一気に飲み干した。
サイフォンにしたって、昔から父親が使っていたものを形見分けのように譲ってもらったものだ。それほど立派なものでもなく、特別なものでもない。長いこと使われてきたのが一見してわかるような古めかしいものだ。
しかし、絢子はこれを大切にしていた。いや、これだけではない。彼女は父親がひとりで暮らしていた頃から使っていたものをほとんど譲り受け、それを大事に使っていた。それが父親に対するせめてもの罪滅ぼしだと彼女は信じていた。

「俺、帰るよ」

ピロロ、ピロロ、ピロロ……

大輔が帰ろうとしたそのとき、充電器に繋がれたままの絢子の携帯電話が突然鳴った。どうやらメールの着信を知らせるもののようで、五秒ほど鳴って音は止まった。

「絢子、おまえ携帯持ってるのか」

「うん…」

さすがにもらったとは言えない。

「そうか。まあ、俺は知らないほうがいいな。由美子がおかしな誤解しても困る」

大輔はそう言って笑うと、自分で玄関の扉を開け、ひらひらと左手を振りながら出て行った。

## 見せたくない過去も暴きたくて仕方がないくらい　2

相変わらず休みが取れない状態が続き、光宏はぐったり疲れていた。自宅には寝に帰るようなもので、それだってたまに妨げられたりもする。そのうちに、そのうちに、と考えてはいるが、まだもう少しここを辞めるまでは時間が必要だ。幸い両親も元気であり、今すぐにでも継がなければならないような事情はない。

それでも、なんとか時間を取りたいと願うこの頃では、大学病院を辞めることが彼の頭を何度も過ぎっていた。こう言っては何だが、市原クリニックは『繁盛』しており、患者はひっきりなしにやって来る。土曜日の診察は好評で、わざわざ光宏を目当てにやって来る患者もいるほどだ。もう辞めよう――――何度も考えては思い直し、を繰り返す日々である。

絢子には二度、メールで延期を申し出た。本当なら直接電話をかけて謝りたいところだったが、そんな時間すらも削られている。最終手段だと考えていたのだが、どうしても時間を作りたいがために、いつも行っているクリニックの土曜診療を休診にすることにした。

定期的に通ってくる患者たちには彼女に会うのだろうとからかわれたりもしたが、光宏も否定はしなかった。絢子に会ってどんなことを言われるのかはわからなかったのだが、それでも彼女に会って彼女の顔を見て、彼女の声を聞くだけで、彼は十分幸せを感じられる。

その土曜日は朝から澄み渡った秋晴れの日で、部屋の窓を開けてベランダに出ると、さすような空気が肌を襲った。光宏はぶるりと身体を震わせた。この冷たい空気は、まるで絢子のようだと思った。

自分に似つかわしくないような連想をしたことに、彼は自分で笑

ってしまった。
――これじゃ、まるで中学生の恋愛だ。
事実、彼はすっかり中学生のときのような恋心を取り戻していたわけだから、あながち間違いでもない。昔に比べれば、彼も随分と積極的になったのではあるが、心の中は、ほとんどあの少年の日と変わらないのである。

出かける前にもう一度、待ち合わせの場所と時間を確認した。駅前の喫茶店で午後一時に、とメールには書いてある。自分が書いたのだから間違いはない。

玄関脇の姿見で、自分の姿を見てみる。これといった特徴のない、そのへんにいる普通の男だ。何度か女性から好意を寄せられたことはあるが、おそらく容姿に一目惚れされたことはない。あの美しい絢子の顔を思い出して、たまらない気持ちになった。
彼女は、あんなに美しい顔の下で人知れず足掻き続け、もがき続けている。他人から見れば、きっと羨望の眼差しを向けられるだろうその容姿は、彼女の仮の姿でしかないように思えてならなかった。彼女の苦しみを、周りの目から欺くための仮の姿――――。

絢子はむしろ、あの容姿であるがために誤解をされている。本当はもっと弱くて、本当はもろくて、本当は誰かを必要としている。その誰かが自分でいられたら、光宏にとってこれ以上はない幸せだ。
彼女にはきっと、自制心が勝ってしまうときが訪れるだろう。それを打ち砕くことができるのか、彼には自信はなかったが、立ち向かう勇気はあった。

待ち合わせの喫茶店は昔ながらの店で、もう何十年と駅前に存在している。光宏が覚えている限り、昔からずっとそこにあった。なんとなく子供には近づけないような雰囲気が漂っていて、繁盛しているふうでもなかったが、それなりに常連客がいるようではあった。間違ってもカフェなどと呼べるような店ではない。

店に入ると店主に適当に座るように促され、光宏は一番手前側の、店に入ってすぐに目につく席を選んだ。注文を取りに来た店主にホットコーヒーを頼むと、光宏は左手首にしている腕時計をちらりと見た。一時にはまだ二十分もある。

「あ、すみません。連れが来ますので、そのときに一緒にお願いします」

そう言ってふっと息を吐いて立ち上がると、店のレジ近くに山になって置かれている雑誌を探る。店主の趣味なのか、はたまた常連客の好みに合わせているのか、旅行雑誌がたくさんあって、その中の一冊を手に取り席に戻った。

それは愛媛へ旅行する際の情報誌だった。そう言えば四国へは一度も行ったことがない。子供の頃は随分いろんな場所に連れて行ってもらったものだが、不思議と四国には縁がなかった。光宏は興味深くその雑誌を読んだ。

彼にとって愛媛と言えば、おおよその日本人が想像する通りのものしか浮かばない。それ以外には――道後温泉は愛媛だっただろうか。

考えているうち、彼の心になんとなく愛媛への興味がわいてきた。そんな暇などないとわかっていながら、ひとりで旅行するにはいいかもしれないと思った。食べ物はおいしいのだろうかと想像もした。

カランコロン――

店の入り口から来客を知らせるドアベルが聞こえた。雑誌に向いていた目を上げると、絢子が光宏を見つけて少し微笑んだのが見えた。彼は雑誌を閉じて座席の脇に置き、彼女はそのまま歩いてきて一言「お待たせしました」と挨拶をすると、その向かい側の座席に座った。

店主がふたたびやって来て、彼女の分の注文を尋ねた。彼女はメニューを見ずに、ミルクティーとサンドイッチを注文した。言い訳でもするように、「お昼食べ損ねちゃって」とつぶやいた。

「どこか…旅行にでも行くの？」

絢子は、光宏が先ほどまで読んでいた旅行雑誌の表紙を見て、言った。彼が忙しいことはよくわかっていたのだが、何と話を始めて良いのか見当がつかず、つい目につくものに話の糸口を見出そうとしたのだった。

光宏は穏やかにふっと笑った。

「なんとなく読んでみようと思っただけで、旅行の予定はまったくないよ。そもそも休みもないしね…」

「そう……」

結局それだけで会話は終わってしまった。お互いに気まずくなって、絢子のほうはうつむき、光宏は視線を彷徨わせた。

少しすると、店主がトレイを持ってやって来た。光宏が来て早々に頼んだホットコーヒーと、絢子の頼んだミルクティーとサンドイッチである。昔ながらの喫茶店らしく、カップはボーンチャイナだ。

サンドイッチは耳を残してトーストしてあり、ベーコンとレタス、それからトマトが挟んであるものを三等分して皿に盛りつけてある。

彼はコーヒーにミルクだけを入れてスプーンでかき混ぜた。彼女はミルクティーに何も入れず、そのままカップに口をつける。店の中は来たときとは違う曲が流れている。

光宏がカーオーディオで最近好んで聴くＮａｔ　Ｋｉｎｇ　Ｃｏｌｅで、ちょうどかかっているのはＳｔａｒｄｕｓｔだった。切ない恋の記憶を歌っている曲で、Ｎａｔ　Ｋｉｎｇ　Ｃｏｌｅはそれを優しくそっと包むように歌っている。ふたりはしばらくの間、それを黙って聴いていた。

## 見せたくない過去も暴きたくて仕方がないくらい　3

「お腹が空いてるときに食べたほうがおいしいよ」

光宏に勧められるまま、絢子は目の前のサンドイッチに手を伸ばした。口に入れると、それはまだトーストされた香ばしさを残していて、懐かしさがよみがえってくる。

思わず涙ぐみそうになって、あわてて食べかけのサンドイッチを置いておしぼりで指を拭うと、グラスに入った水を半分ほどのどを鳴らして飲んだ。涙はすんでのところで引っ込んでくれて、なんとか光宏をごまかすことには成功したように、絢子には思えた。

光宏が傍にいると、なぜか感情が勝手にあふれ出てきてしまうことに絢子は気づき、戸惑っていた。最近では、彼女はその理由を考えないように努力しなければならなかった。

市原くんとの間の何かについて、ぜったいに考えてはいけない。考えてしまえば、わたしはもう逃げられなくなる――。

絢子は、とらわれそうになる頭を無理矢理に切り換えて、ふたたびサンドイッチを頬張った。すると、今度は昔の思い出がよみがえってきた。二択を迫られた挙げ句、彼女は仕方なく思い出に浸ることに決めたのだった。

絢子の母親がまだ父親と一緒に夫婦仲も睦まじく暮らしていた頃、四人で近所にあった大きな公園によく出かけた。大輔も絢子もまだ小さな子供で、ひとつとして事情を知らなかった頃だ。

母親はいつも決まって、トーストした耳の付いた食パンにバターを塗り、玉子やらきゅうりやらを挟んでサンドイッチを作った。ときには、絢子もその手伝いをした。パンをトーストする香ばしい匂いが小さな家の中に広がり、それはそれは幸せな時間だった。

思い出してふたたび出かかった涙をごまかすようにして、絢子は最後に一口、サンドイッチにかぶりつく。トマトは水分が多いので、食べ方に気をつけなくてはならない。

絢子が食べている間、光宏は彼女が返事をしなくてもいいような話――中学の同級生の近況についてなどの話――をした。彼女は食べながらも時折彼の話に相槌を打ち、それは決して無理をしているようには見えなかったのだが、上の空のようにも思えて、それは彼を切ない気持ちにするのだった。

べたべたになってしまった手をおしぼりで拭うと、絢子は口元を紙ナプキンで押さえ、それから水を一口飲んだ。これから言おうとしている内容を考えると、平常心ではいられないのは確かだ。光宏が何かを感じ取っているようには見えなかったが、予想はしていてもおかしくないと絢子は思った。

「話したいことがあるの」

「うん」

絢子がやっとのことで切り出した言葉も、光宏にとっては意外性

のないもので、身構えはするものの、ある程度の予想はできていた。だからこそこうやって、彼女を前にしても冷静にしていられるのだ。これくらいのことで、彼はめげている場合でもない。

「話なら聞くよ。何でも来い、だ」

とぼけたようにそう言って笑う光宏に、絢子は少しだけ癒された。きっと彼は、彼女が何を言い出してもきちんと受け止めてくれるだろうことが一瞬でわかったからなのだった。それがわかったことが何なのか、やはり考えてはいけないのだと絢子は思う。

「あの…わたし、もう市原くんとは会ってはいけないと思う。会わないほうがいいと思う。だから、もう、連絡を取るのはやめたいの」

絢子はこれを一息で言い切ると、今度は取っ手を持って、ミルクティーの入ったカップに口を付けた。心なしか、彼女の手は震えている。光宏が彼女を見ると、その目は伏せられたままで、表情はあっという間に固くなっていた。

予想していたことではあった。暴かれることを、おそらく嫌がっているだろう彼女が、自分で過去を話し始めてしまい、あまつさえすべてをさらけ出してしまうなどということが平気だとは思えない。光宏が無理矢理に聞き出したわけではなかったのだが、そう仕向けていたのは間違いなく彼自身であり、そのことについては後悔がないではなかった。

「石川さん」

彼は彼女に優しく呼びかける。彼女の俯いた顔が、その呼びかけでゆっくりと上がり、目と目が合ってふたたびそらされた。それでも、光宏は言葉を続けた。

「石川さんは、不本意なんだろうと思う。僕がきみの過去を知りたいと思っていて、きみが今抱えているものを少しでも分けてもらいたいと考えていて、だから石川さんが見せたくない過去も、結果的には僕が暴いているんだ」

「ち、違うわ！　わたしは――」

光宏はかぶりを振った。悲しそうでも、申し訳なさそうでもない。ただ、真剣な目がそこにはあった。

「違わないんだ。僕は、今でも石川さんのことが好きで…いや、違う。前とは違う意味で、昔よりもっと好きになってしまって、だから、きみのことは何でも知りたいと思ってる。持ちきれないものは、何でも僕が持ちたいと思ってる」

絢子は彼の気持ちを知っていて、結果的に利用しているのだということを、改めて思い知らされていた。昌美に言われた言葉がよみがえってきた。

『知ってたくせに…今だって、わかってるくせに、気を持たせるようなことして、惑わせて』

昌美は正しい。絢子は思わせぶりな態度を取ったつもりはなかったのだが、光宏にとってみればすべてそう映っても仕方のないことなのかもしれなかった。彼が絢子に何かを求めたことなどほとんどなくても、彼が期待する何かが、彼女のほうにあったのかもしれない。

そうやって追いつめて、結果的に告白まがいのことまで、今ここでさせてしまったのだ。それは絢子の意図するところではなくても、

結果的にはそうなのであって、彼女は行き場のなくなったささやかな願いを、ふたたび口にすることができなくなっていた。

「石川さん」

「……はい」

「きみが見せたくないと思ってる過去も、何もかも、本当はきみの意思とは関係なく暴きたくて仕方がないくらい、きみのことが好きだ」

「……」

今度は、絢子がかぶりを振る番だった。言われても、彼女にはどうすることもできない。切なくて、苦しくて、地獄のような思いと戦ってきた、この十年間が彼女の脳裏に浮かんだ。光宏にその思いをさせることは、彼女は望まない。

それでも――――。

「きみに求めるものなんて、本当は何もない。ただ、きみがそこにいるだけで、他には何一ついらない。ただ傍にいて、ただきみの何かを受け入れたい。それだけでいいんだ」

彼は既に、彼女の言葉すらも今は求めていなかった。

「きみが僕の気持ちを受け止める必要はないし、その努力もいらない。ただ、きみの苦しみを知って、許されるのなら、それを共有したいんだ」

求められるまま受け入れることに、苦痛が伴わないわけではない

が、それでも、それによって救われていることは確かだ。
絢子は、光宏がこんなにまで思ってくれることに、ただ感謝していた。その思いに値しないとしても、彼女はただ感謝して、その言葉だけは受け入れていた。

## その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた　1

『本家から呼ばれてる。急いで来られるか』

電話口でそう話した兄の大輔は、珍しく深刻な声だった。本家から呼ばれているということはつまり、俊輔から呼ばれているということだ。そこに思い当たると、絢子は憂鬱になり、溜息が出てしまうのを抑えることができない。

絢子が俊輔に会うのは、祖父の葬式以来だ。母と祖父との折り合いが悪かったため、絢子も大輔も祖父とはろくな話をしたことがなく、よってその死に接しても特別な感情を抱かなかった。絢子はそのことに自分でショックを受けていたのだが、例によって大輔が、彼女の中でくすぶっていた鬱々とした感情をうまく収めてくれた。

こんなにもくっきりとした気持ちを持ちつづけているのに、俊輔に会ってきちんとした応対ができるのだろうかと絢子は思う。

絢子の心は乱されていたが、行き場のない思いに今後も蜜が与えられることがないのは知っている。結局俊輔は関係なく、自分の問題なのだと、彼女は二回目の深い溜息をついた。

すべての元凶であると絢子は思っているのだが――五年前に亡くなった祖父は、すこぶる頑丈な男だった。病気もろくにしないような健康体で、体調には人一倍気を配っていた上に酒も煙草もやらなかったのだが、こと女性関係は奔放だったと聞いている。

はじめて間近に会ったときのことは、絢子は今でも鮮明に覚えていて、祖父に親愛の情を抱けなかったのはそのせいかもしれないとさえ思っている。

あれは石川家の門をくぐった十歳の春のことで、絢子は、祖父と母親の折り合いが悪いことに一目で気づいた。それほどふたりの様子は穏やかならざるものがあり、そうであるならなぜここに連れて来られたのかと思ったのを覚えている。

祖父は鋭い目で孫たちをにらみつけるように見つめ、そこには愛情などというものは微塵も感じられなかった。顔には深いしわが刻まれており、それが強面の顔をより一層怖く見せていた。言葉を交わす以前に、絢子は祖父の姿に怯えていた。

近親憎悪というものは厄介なものだ。祖母はとうの昔に亡く、祖父と母親の父娘の仲は普通でなく、婿養子だったはずの父親は石川の家に近づきもしない。

既にそれだけで十分なくらいこの家の特殊さを表していたのだが、俊輔のこと、そしてそこに絢子と俊輔の関係が連なり、複雑に絡み合っていた。

絢子と大輔が父親に対する誤解を解くことができたのは、母親が死んだ後のことだ。絢子は大学に入り、俊輔への思いと必死に闘っていた。祖父の差し金だったのだろう、俊輔は見合い話を多数持ちかけられており、その頃には諦めにも似た様子を窺わせていた。

「俊兄くらいの人なら、お見合いなんかしなくてもいい人いるだろうにな」

大輔は既に二浪した上に予備校通いをしていたのだが、そこに焦りはまったく見られず、相も変わらずのほほんとのんびりした風情だ。兄さんは気楽な質でうらやましいなどと、絢子が時々ぼやいたりするほどだ。

大輔が育った環境は、お坊ちゃん育ちというのとは実際は違うの

ではあるが、彼の様子はまさにそうした育ちを思わせるような一点の曇りのない明るさに支えられており、この石川の血のどこにそんなものがあるのだろうと訝しく思われる程である。おそらくは父親の系統がその楽観的な性質を持っていたのだろう。そしてそれは、大輔にとっては幸いなことだった。

俊輔がなかなか結婚しようとしなかったのは、決して絢子を思うが故ではない。彼にとって、絢子は障害にもなり得なかった。それを知ったとき、絢子は俊輔から離れようと思ったのだった。

久しぶりに門をくぐった石川の家は、以前と変わらぬ重苦しい雰囲気が漂っていた。左手に離れが奥へとつづき、その向こう側には立派な庭園がある。昔、絢子はその離れの奥から二つ目の部屋に住んでいた。息を潜めるようにして俊輔を待った夜のことは、きっとこれからも忘れられるものではないだろう。

絢子は、何事で呼ばれたのかを想像していた。呼ばれたのは大輔と絢子のみで、それは絢子を呼ぶためのカモフラージュで大輔を呼んだようにすら思えた。

決まったのだ、と絢子は思った。

俊輔はふたりを離れで待たせ、自らそこまでやって来た。彼の後ろを歩く誰かの姿を、絢子は障子の影に認めた。背の高い俊輔より頭ひとつ分ほど小さいその影は、思ったほど絢子の心を乱さなかった。

十年は無駄ではなかったのだ。彼女が思いつづけた十年という時間は、彼女の心に高くて立派な防波堤を築いていた。

「式は、来年の春だ。来てくれるね」

絢子は、帰り道をどうやって歩いてきたのか思い出せないほど、ぐるぐると遠回りをしていた。どうしてもひとりの部屋に帰れず、一秒でも長く外にいたいと思って彷徨った。

覚えのある冷たい波が、ふたたび彼女を襲おうとしていた。それはすべてを飲み込み、押し流してしまうような強い波だ。どんなに高い防波堤を築こうと、やすやすと越えてくる。酸素を求めるように、絢子は携帯電話の通話ボタンを無心で押していた。

## その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた　2

光宏は、そのときまだ病院にいた。一日の勤務を終えた帰り道、携帯電話を開いて、見慣れない電話番号を見つけた。通常は、こうした番号を見ても無視を決め込んでいる。

しかし、その見慣れぬ電話番号の主は留守番電話にメッセージを残していた。彼はそれを聞いて、さらに驚くことになった。

「市原光宏くんですか。はじめまして。絢子の兄の大輔です」

光宏が大輔に会ったのは、あの電話のメッセージを聞いた週の週末の土曜日で、その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた。憂鬱な雨の日だと思わないではない。大輔からの電話など、光宏には絢子に関する悪い知らせとしか思えなかったからだ。

大輔は、絢子の話では想像のできなかった、彼らの祖父に似たのだろう体格の良い男性だった。笑顔は人懐こく、明るさと人の良さの滲み出るようなその表情で、光宏はすぐに好感を持った。絢子の話の通り、彼は彼の周りの人間に良い影響を与える何かを持った人物であることは間違いないようだった。

光宏の仕事が仕事なだけに、一般的な勤め人である大輔とは時間が合わない。よって、会って話がしたいと言われて、結局都合がついたのは夜の八時過ぎであった。

しかしながら、大輔のほうはそんなことを特に問題に思ってはいなかった。彼の妻の由美子はとにもかくにも絢子を毛嫌いしているのだが、絢子が直接絡むことのない付き合いに関しては特に口を挟むでなく、その点は大輔も不満に思っていなかった。

由美子が最初に絢子に会ったのは、大輔と由美子が付き合い始めた高校の頃のことだ。絢子は地元では有名な美少女であったから、当然のことながら由美子も聞き及んでいた。大輔と絢子は外見という部分ではあまり似たところがなかったため、最初は、大輔がたびたび口にする「妹のアヤコ」が石川絢子と同一人物なのだと、すぐにはわからなかった。

由美子が知る石川絢子は、ただそこにいるだけで常に強い光を放っていて、容姿の美しさを抜きにしても、他の女の子が束になってかかってもまったく歯が立たないような存在感があった。よく知ることはなくても、嫉妬と羨望の混ざったような気持ちを由美子も持っていた。

ところが、由美子が大輔と付き合うようになってから、彼の妹として実際に間近で接してみると、そうやって遠巻きにしていた頃の印象とは随分と違う女の子であった。

絢子は口数が少なくておとなしくはあったもののごく普通の女子高生で、ただその容姿や醸し出す雰囲気のせいか、誤解されやすいのだ。それを強く否定することもなく、ただ控えめにしているだけなのだが、思春期の女の子たちにとってはその姿勢すらも鼻持ちならなかったのだろう。

由美子もまた、そうした女の子と同じ気持ちを持っていた。出る杭は打たれるが、彼女は出ていなくても打たれる。それがまた一層憎らしく思えた。その上、大輔は一にも二にも絢子、絢子である。

単なる羨望や嫉妬の気持ちより強い、明らかな憎しみに変わってしまうまではそれほどの時間はかからず、それは大輔と結婚してからより一層強くなった。

由美子が絢子に対して疎ましく思う気持ちは、当然本人に伝わっ

ていることだろう。それでも、どうしても止めることができない。絢子を見るたびに由美子は自分が惨めに思え、さらに絢子を疎むようになり、その悪循環は未だ終わる場所を知らない。そのことで大輔が心を痛めているのを知っていても、由美子にもどうすることもできなかった。

## その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた　3

市原光宏という名前は確かに聞いたことがあった。市原クリニックという病院のことは大輔もよく知っており、その病院の跡取り息子だと言われればすぐにピンと来た。

会ってみればなんと言うことはない、ごく普通の好青年だ。構えるほどでもない。ただ、絢子が拘泥している相手ではないのだろうことは、如何に鈍いと言われる大輔であっても即座にわかったのだった。

それでも、彼に人目を引く何かがあったほうがよかったとは思わない。むしろ、光宏に何も感じられないことは光明でもあると大輔は思っていた。

人当たりが悪いわけでもないのに、幼いころからなぜか絢子には友達がいなかった。孤独を気取っていたようにも思えないのだが、家族以外の人間を遠ざけるような何かが彼女にはあって、それがどうやら他者とのかかわりを持つときの障壁になっているようだった。

そんな絢子のことを、大輔はいつでも気にかけていた。兄に心配をかけるようなことは何ひとつしない彼女のことを、それでも大輔はいつも心配していた。几帳面で、神経質なほど真面目に事に当たる彼女がいつか根元から折れてしまいそうに思えて、父親とともにいつも気にしていた。

父親が死んでから、絢子は以前よりもさらに言葉少なになった。大輔の妻の由美子のことでは彼女に随分と嫌な思いもさせているの

に、彼女は悲しい顔ひとつしなくなった。

血縁ではない誰かが彼女の傍にいてくれるようにと、大輔はいつも思っていた。誤解されやすい彼女の背中に、そっと手を当てるだけで励ますことができるような存在が現れることを願っていた。

石川本家に行った日、絢子の様子におかしなところは感じられなかった。大輔は家まで送ると言ったのだが、彼女はひとりで帰ると言い張った――それでも、そこに普段と違う何かを感じることはできなかった。

彼女は、身内にすらその何かを見せないために、幾重にも覆い隠していたのだろうか――――しかし、大輔にはいくら考えたところで何もわからない。そういう鈍感さが彼の立場を気楽にしてきたのだということさえ、彼自身は意識することなく生きてきたのだ。

自分の仕事が終わるのを待っていてくれた絢子の兄――大輔を助手席に乗せ、光宏は隣町の大きな駅まで車を走らせていた。大輔はにこやかに笑顔を見せていたが、その瞳の奥は笑っていないように思えた。その理由ははっきりしていたから、光宏はいつになく構えていた。

絢子が電話をかけてきた日はたまたま非番の日で、偶然呼び出しもなく、だからこそその電話を受けることができた。光宏はその幸運に感謝していたのだが、彼女が電話の向こうで意味の通じない言葉を発しているのを聞いたときにはもういても立ってもいられなく

なっていた。
彼女は光宏に助けを求めたりはしなかった。ただ、ずっと謝っていた――ごめんなさい、と。本当は誰に謝りたかったのか、彼には今もわからない。
要領を得ない彼女に居場所を吐かせるのは一苦労だった。電話の向こうの彼女がかすれた声でようやくそれをつぶやくと、光宏は「そこを動かないで」と強い調子で命令して、小さな声で返事が返ってくるのを焦れた気持ちで待った後、「絶対だ」と普段にはない強い調子で念押しをして電話を切った。

ものの数秒で着替えて車のキーをつかみ、光宏は駐車場に向かう。気づけば、もう駆けだしていた。漠とした不安な気持ちとひどい焦りで手元が震えていた。それでも行かなければならない。
やっとのことでエンジンをかける。音楽をかける気分にはなれなかった。ふっと短い息を吐き、徐行しながら駐車場から車を出して表に出ると、蜘蛛の糸のような細かな雨が既に路面をいくらか濡らしていた。ウィンカーを出して左にハンドルを切り、そのまま道なりに車を走らせて国道に出る。

大輔が他愛もない話をしている横で、それに適当に相槌を打ちながら、光宏は絢子のことを考えていた。彼女のその心は、数日経った今でもまるでつかめてはいない。

## その日は薄く紗を掛けた雨が降っていた　4

いつものように近くのコインパーキングに車を停めてドアを開けると、相変わらず細かい霧のような雨がうっすらと降っており、幾らか水滴を溜めては車の屋根を流れ落ちていた。

学生時代からよく来るこの店に、一度だけ絢子を連れて来たことがある。あれは彼女に再会して何度目だったのか――そのときの彼女の様子を、光宏はよく覚えていた。

彼女はその日、よく食べ、よく飲み、そしてよく笑った。後から考えれば、普段にはない高揚した様子が痛々しく思えたほどだった。そのとき彼女がなぜ自分を呼んだのか、光宏は今でもわからなかった。

一目見ただけで目を奪われずにはいられない。彼女の微笑みは大輪の花が咲き誇るようで、目をそらすことができなくなる。彼女が話をしている最中もずっと、周りの男から彼女へと向けられる欲望にまみれた視線に、自分がひとつひとつ嫉妬をしていたことを、光宏はよく覚えていた。

あの日が境目だったのだろう。彼女の心のなにかに、彼は知らず踏み込んでしまっていた。しかし、少しも後悔はしていない。

地下へ向かう階段を先に降りて後ろを一度振り返り、大輔が後をついてきているのを確認して、それから店の扉を開けて、彼を招き入れる。この前絢子と来たときですらすれ違うのが精いっぱいだったこの場所は、光宏が如何に細身だとは言え、大柄な大輔には窮屈そうではあったが、身をかがめて中に入って行った。

つづいて光宏が店の中に入ると、店は随分混雑していた。カウンターに座った若い男が席を詰めてくれ、空いたふたつのいすにそれ

ぞれが腰掛けた。光宏は席を詰めてくれたとなりの男に軽く礼を言って、それから大輔に飲みものを尋ねた。

「ビールでいいですか」

「俺は何でも」

「じゃ、ビールと烏龍茶で」

大輔は物珍しそうに店を見回していた。ごちゃごちゃとした店内には男の客ばかりで、この時間は仕事帰りのサラリーマンが多かった。そういえば大輔も普通の勤め人だと聞いている。

「大輔さんは、普段はどういう店で飲みますか」

話の糸口をと考えて光宏が出した問いかけに、大輔は口の端をきゅっと持ち上げ、にやっと笑いながら答えた。

「気を遣わなくていいさ。そうだなあ……俺は普段は外で飲まないなあ。うちの嫁さん、俺が外で飲むとあまりいい顔をしないんだよ。きみのほうも仕事柄なかなかゆっくり外で飲むことはないんだろうね」

「そうですね。いつ呼び出しがあるかもわかりませんし、最近では酒自体をあまり飲まなくなってしまいました」

光宏はもともと酒が好きだったわけではなかった。ただ付き合いで飲んでいる場合が多く、飲めないわけではなかったが、酒を飲むことが目的で店に通うこともなかった。

「大変な仕事なんだな。あ、そうだ。今日も都合が悪くなったら俺に遠慮しないで、またこの次ってことで。まあ、相手が男だってはっきりしてる付き合いは、うちの嫁さんも何も言わないからさ」

大輔は「尻に敷かれちゃってみっともないよなあ」と言いながら幸せそうに笑っている。この人のこの明るさが石川さんを救ってきたのか――光宏はそう思いついて、右手をぎゅっと握りしめた。

意識的にその話題を避けていた。

ようやくそこに触れることができたのは店に来てから一時間ほど経ってからで、しかし大輔ととりとめもない話をするのは少しも苦痛ではなかった。何でも受け止めてくれるような安心感があって、光宏はいつの間にか話を巧みに引き出されているのに気づいていた。こういう人が聞き上手というのだろう。

この人はただ明るいだけじゃない。本人が言うほど凡庸なわけでもない。光宏は、石川家の血をそこに確かに感じていた。

## きみが願うことなら、何でも叶えたいと思った　1

表に出たときには、もう雨は降っていなかった。雨の降った痕跡はそこかしこにあったが、雲の切れ間から顔を覗かせた月が、今は薄ぼんやりと辺りを照らしている。

いい具合に酔ってますます陽気になった大輔を、二時間かけて自宅まで送り届けた。酔いの回った大輔は一方的に喋りつづけ、光宏はそれに対して時折笑いながら相槌を打っていた。彼が車に乗っている間、絢子の話は一度も出なかった。ただの一度も、である。

出迎えた妻の由美子は、大輔から聞いて光宏が想像していたよりずっと美しい女性で、物腰も柔らかく、すこぶる感じのいい人であるかのように映った。大輔が「また飲もう」と暢気に笑って言った瞬間に見えた、光宏に対する刺すような視線がなければ――おそらくは完璧な妻の姿であっただろう。

玄関から辞すると、光宏は外に停めてあった車に乗り込んでエンジンをかけ、元来た道を引き返す。奇妙な静けさが不安感を煽り、たまらずカーラジオをつけた。流れてきたのはＣａｒｏｌｅ　ＫｉｎｇのＩｔ，ｓ　Ｔｏｏ　Ｌａｔｅで、少し前にどこかで聴いたような気がして、彼は記憶を手繰り寄せる。

絢子と再会して、はじめて彼女とふたりで会ったときに店でかかっていたのがこの曲で、彼はそれを思い出して口元を僅かに緩め、聞きながら知らず口ずさんでいた。

あのとき彼女が話していた亡き父親がどういう人間であったのか、大輔に接してみてはじめてわかったような気がしている。石川家で暮らすにはある種のしたたかさ――図々しさと言い換えてもいいだ

ろう――がなくてはならず、それが大輔にはあり、彼らの父親にはなかった。どういう経緯だったかまではわからなくとも、そのせいで誤解されていただろうことは光宏にもわかる。
それは、石川家の当主という立場には必要、いや必須の資質であった。絢子が自分には重すぎると言った石川の家は、そのしたたかさを蓄えた俊輔が当主となっている。本来であれば大輔が座るはずであっただろうそこに、現在俊輔が座っている――そのことに違和感がないわけではなかったが、理由は追究する必要もないほど明確である。

おそらくは――彼らの祖父に翻弄されつづけた、彼と彼女をその檻から解き放つため。
すべてを繋いで考えてみれば、あっけないほど容易くその結論に行き着くのだが、しかし光宏は驚いたりはしない。
光宏がはじめて俊輔に会ったあの夏の日、もう既に彼は決意していたに違いないのだ。

『私が心に決めた人はもうどこにもいないのです』

あの日、何の縁もない少年であった光宏に吐露した言葉。俊輔がその生涯において唯一心惹かれた女性を守れなかったこと。その忘れ形見だけは何としても守りたいのだという気持ち。そのときは何のことなのかまるでわからなかったのに、今ではすべてが繋がって見え、それが殊更に悲しく思える。
そう、まさに今、俊輔はそのために「そこ」にいるのだ。その身を賭して。

いずれ俊輔に会わなくてはならなくなるであろうことは、光宏にもわかっていた。

例えばそのとき、絢子が自分の傍にいなかったとしても。

帰宅すると、部屋はもぬけの殻になっていた。今朝までいたはずの絢子の姿はもうどこにも見当たらず、その痕跡は塵ひとつも見つからなかった。酒を一滴も口にせずにいたというのに、まるで酔ったように頭がふらつき、目に見える地面はぐらぐらと揺れて波打つようだ。

光宏は自分の体内にあるすべての空気を吐き出すようにして、自分を落ち着かせようと大きな溜息をついた。絢子がいなくなることは昨夜の段階で予想していたことである。それでも彼はほんの僅かの可能性のほうに縋りたかった。無理なこととは知っていて。

機械のようにぎこちない手足を動かして冷蔵庫を開け、中から缶ビールを取り出すと、それはうんざりするほどよく冷えていた。勢いよく缶を開けて一気に呷ると、半分ほど残ったままで手の中の缶をぐしゃりと握りつぶす。缶は軽い金属音を立てて潰れ、残っていた液体は泡とともにだらだらと手を伝って流れ落ち、果ては肘のほうまで濡らしていった。

彼女のか細く喘ぐ声が聞こえる———幻聴なのかもしれない。

昨夜、光宏は絢子を抱いた。組み敷いた彼女の肌の匂いを、彼がはじめて知った夜であった。

## きみが願うことなら、何でも叶えたいと思った　2

絢子が電話をかけてきたその日、簡単な言葉すらうまく継げない彼女の意思を確かめることなく、光宏はそのまま自宅へと連れ帰った。乾燥して少しかさついた彼女の細い指が彼の上着の裾を終始つかんでいて、その指は小刻みに震えていた。

ここへやって来てから毎晩、彼は絢子に寝室を譲り、自分はリビングのソファに横になって眠った。この数日間で、最初は戸惑っていた彼女も次第にふたりで過ごすことに慣れてきたように思えていた。アパートから当面の荷物を持って来させた後は、この場所から会社に通うようにまでなっていた。

何かを追及するつもりはなくても、光宏にとって幸福なその時間がそのままつづくはずはなかった。彼はそんな穏やかな日常がつづくことを望んでいたのであったが、絢子のほうはそうではなかったに違いない。だから、昨夜、寝室からすすり泣くような声が途切れ途切れに聞こえてきたとき、聞かなかった振りをしておけば、彼はそのままでいられたのだろう。

抱いたからどうにかなるわけではないことは、光宏にだってよくわかっている。しかし、彼女との関係が始まることなく終わってしまってもかまわないと、その一瞬彼は思った。震える彼女を自分が温めたいと、そう考えた。

それが単なる情欲ではなかったとは言わない。光宏にとっては恋い焦がれた相手で、その髪の毛一本に至るまで、すべてを愛おしく感じている。寝室のドアを静かに開けて、彼女の頼りなげな背中を見た瞬間から、確かに欲情していた。そのとき考えたことはもちろんそれだけではないが、欲情していたことは間違いではない。

絢子は抵抗をしなかった。今考えれば、それが既におかしいのだということに思い当たるべきであった。それでも、細い身体をさらに小さく丸めたまま、枕を抱きしめて顔を埋め、声を押し殺すようにしてひとりで泣いているのを見過ごすことなどできなかったと彼は思う。

彼に組み敷かれた彼女にはあの強く惹かれるような激しさはどこにも見えず、そこに横たわっていたのはただの弱々しいひとりの女であった。光宏はどうしようもない狂おしさに流されるように彼女にそっと触れた。その瞬間、彼女の唇から吐息が零れ、彼の心の内には例えようのない愛しさが溢れ出てきた。

ただ、そのままにはしておけなかった。例え絢子が求めているのが自分ではなくても。

数日間を過ごしたマンションを後にして、絢子はふたたび、古びたアパートに戻っていた。光宏に黙って出てきてしまったことを、彼女は今になってひどく後悔していた。

『――わかってるくせに、気を持たせるようなことして、惑わせて』

いつか昌美から言われた言葉を、今になってふたたび思い出す。その言葉が今、絢子の胸をぐさりと突き刺していた。気を持たせるどころでも、惑わせるどころでも、最早ないところまで来ている。彼と寝たことを後悔してはいないが、ひどい罪悪感があった。

あのときはそうするしかなかったのだと、気持ちのない行為を正当化しようとする自分自身を、絢子は強い嫌悪感でもって否定しようとしていた。流されたのでもなく、自分自身の意思で彼に抱かれ

たという事実を歪めるようで我慢ならず、ともすれば逃げを打とうとする自分を絢子は追いつめ、問い質した。

――わたしは、ふしだらな女だわ……。

好きでもない相手とセックスすることが悪いわけではないが、相手の気持ちを利用するのは罪だ。少なくとも絢子はそう考えていた。

光宏のことが嫌いなわけではない。それでも、俊輔に抱いた気持ちとは違うこともわかっていた。間違いなく、光宏のほうもそう感じていただろうと思うと、絢子は胸が張り裂けそうになる。

『僕はきみが好きだ。僕は……今、きみを抱きたいと思う。だから、きみは何も悪くないんだ。全部僕のせいだから』

まるで耳元で囁かれているかのように光宏の声がよみがえってきて、絢子はぞくりとした。あのときの彼のかすれた声を思い出せば、彼女は自分のしたことの意味を問い質さずにはいられない。

『……今は、忘れて。何もかも、今だけは我慢しないで』

そもそも泣いていたのは何のためだっただろうか。それすらも、今はどうでもいいことのように思える。

結果、そこから逃げ出した。そのときはもう彼の傍にはいられないと考えたのだとしても、逃げた事実は何も変わらないのである。そして、逃げた自分をもうひとりの自分が問いつめる。

携帯電話を彼の部屋に置いてきた。すぐに見つからないように彼女は隠したつもりであったけれど、もしかすると彼は簡単に見つけてしまっているかもしれないと思った。そういう勘が働く彼のこと

が――考えてはいけないとすぐに思い至り、無理やり思考を切る。
これでもう、ふたりを直接繋ぐものはなにもない。その事実に、絢子は心から安堵していた。

電話機が光っていることに気づいて、絢子は伝言を二件再生した。兄の大輔からで、最初は様子を窺うようなもの、もう一件は明らかに不在を心配するような声で伝言が入っていた。気持ちの整理がつかないままで大輔に電話することはできないと思った彼女は、ふたたび留守番電話を設定した。
会社に電話を入れ、午前休の許しを得て午後から出社した。幸いにも仕事はそれほど溜まってはおらず、黙々と自分の仕事をこなした。その日は来客もなく、静かな一日であった。珍しく社長の中島が声をかけてきて、出張の土産だと言って煎餅の詰め合わせを置いて行った。

## きみが願うことなら、何でも叶えたいと思った　3

翌日は非番だった。妙な酔いのせいでなかなか寝付くことができず、光宏が眠ったのは午前四時を回ったところであった。規則正しい生活とは無縁であるが、彼はその中でも規則正しくあろうとする習性が身に付いていて、こうした非番の日であっても朝になれば目が覚める。

何ひとつ残さずに去って行った絢子の、その僅かに残る匂いを嗅いだだけで、彼の心の中は彼女のことで埋め尽くされた。眠りに入るどころではなく、それはどんどん妨げられ、何としても眠ろうと残った酒を適当に呷っても瞼は落ちなかった。

彼が眠れなかったのは、彼女が去ったからではない。

上半身を起こし、両手を天に向かって突き出してひとつ大きく伸びをする。眠っている間も身体に力が入っていたのか、骨が鳴るような音が身体のあちこちから聞こえた。

引いたカーテンの隙間からは細い光が差し込んでいる。ベッドから出て窓際まで行き、カーテンを全部開けないままで僅かに捲り外を見やった。前の晩からは一転して冬晴れとなっていたが、空気は身震いするほどで、窓は凍り付いたように冷たかった。窓の外で痩せ細った小さな鳥が猛スピードで飛んで行くのが見えた。

寝室から出てキッチンに向かうと、お湯を沸かして、インスタントコーヒーをキッチンで立ったまま飲んだ。光宏は料理ができないため、自宅には飲み物の類しか置いていない。

キッチンから出てリビングに行くと、テーブルの上には昨夜と変わらず、潰された幾つかの缶と、光宏が絢子に渡した、彼女の携帯電話が置かれていた。彼は小さく息を吐いてコーヒーの入ったマグ

カップをテーブルに置き、置かれていた彼女の携帯電話を手にし、そして、テーブルの脇の床の上に座り込んだ。

携帯電話は忘れていったわけではないだろう。故意に置いて行かれたものだ。彼がそう思ったのはそれを見つけた場所のせいで、それはキッチンのシンクの下にあったのだ。

電源は落とされており、彼が昨晩偶然その扉を開かなければ見つけることはなかった。今でも、何故そこを開けてみたのかは思い出せない。

光宏は、絢子を抱いたあの夜、彼女が願うことなら何でも叶えたいと思った。彼女がそれを願わなければ、きっと最後まで彼女を抱き締めただけで終わっていたはずである。それくらいの理性は、彼にもまだ残っていた。

あのときの彼女は確かに、彼と身体を繋げることを望んでいた。肩に触れて振り返ったときに見せたその瞳には、目の前の男を渇望する色が滲んでいた。光宏には、決して考えすぎとは思えなかったのである。

彼女のその唇から発せられる存外甘ったるい声を、苦しげに堪える表情を、目尻から零れる涙を、彼は何度も思い出す。繋がったままでまっすぐに見つめるその瞳は、恋い焦がれたあの苛烈さを確かに秘めていて、彼を強く惹きつけて離さなかった。

行為の最中に考えたのはひたすら彼女のことばかりで、光宏は自分でも呆れるほどに彼女に夢中なのだと改めて思わされた。絢子が囚われる相手を思い出さないように、他の誰にもしたことのないほど丁寧に、長い時間をかけて優しく愛撫し、彼女が我を忘れて溺れるほどに激しく、その深い闇の中へ幾度も沈み込んだ。

――石川さんは今、何を考えているだろうか。

疲れ果てて眠った彼女を腕に抱いたときの柔らかい感触を思い出しながら、光宏はただ彼女を思う。絢子の気持ちが自分にないことを、光宏は知っている。そうであってもなお、短いとすら感じた彼女を抱いた時間は、彼にとっては幸福そのものではあった。

しかし、自分のしたことが彼女を苦しめていて、だからこそ出て行ってしまったのかもしれないと考えると、深い罪悪感があった。彼女が自分の言葉を単純に信じるような女でないことを知りつつも、彼女が泣いていなければいいと、故意に置いていったのだろう、彼女の携帯電話を見つめながら、ただそれだけを願った。

考えごとをしている間にもコーヒーの入ったマグカップはどんどん冷めていき、光宏はすっかり冷たくなった液体を無理やり喉の奥に流し込んだ。

昌美は、暮れも押し迫った時期にとうとう見合いをすることとなっていた。相手のことを知ろうともせず、相変わらず釣書を放置しつづけていたのであるが、なし崩しに首を縦に振らされていた。

幾らか諦めもあった。断ることが前提の見合いに気乗りなどするはずもない。

光宏からの連絡をしばらくじっと待っていた昌美は、彼がとうに忘れてしまった返事をさせるため、市原家に出向いた。彼の家族は昔と変わりなく彼女を歓待し、現住所を知らないことに些か驚きながらも、尋ねるままに教えてくれた。そして、その足でその場所へ向かった。

彼女は運が悪かった。インターフォンに出たのは彼ではなく、彼女が一番会いたくないと考えていた、聞き覚えのある女の声だったのである。

## いのちの音を聞きながら　1

「石川……さん……よ、ね？」

こぼれた問いかけは無意味であった。向こう側から聞こえた返事は絢子の声に間違いなく、昌美はその事実を受け入れることができないだけであったのだから。

お互いの間に、束の間沈黙があった。瞬く間にそれを遮ったのは昌美のほうで、躊躇いがちに返事をした彼女に対して、それでも強く立ち向かおうとしていた。

「ああ、わたし、妹尾です。ちょっと用があるんだけど、みっちゃん、いる？」

ややあって聞こえてきたのは、絢子の戸惑いが目に浮かぶような返答だった。

『あの……、市原くんは……たぶん、もうすぐ帰って来ると思う、けど……』

「じゃあ、待たせてもらいたいから、上がってもいい？」

『……』

「大丈夫。わたしが責任を持つから、開けてくれない？」

前に会ったときにあれだけ言い訳をしておきながら、しかも昌美の気持ちを知っていてここにいる絢子のことを卑怯だと思った。それでも、昌美は絢子が何故ここにいるのか知りたいと願った。

程なく、返事の代わりに機械的な音とともに扉が開く。と同時に、昌美はそのマンションの中へと入って行った。

学生時代も特別仲が良かったわけではなく、絢子と雑談らしいことをした記憶もない。絢子の戸惑いは既に表情に表れていたが、それと同じくらい、昌美のほうにも戸惑いがあった。思い立ってここに来て、最後に諦めがつけばそれでいいと思っていたのにもかかわらず、予想外の存在ですべて狂ってしまったのである。

相手に気づかれないように小さく溜息をついた絢子を見て、つくづく神様は不公平だと昌美は思った。彼女は素顔でいてさえも美しく、女である昌美から見て不愉快に思えるほどの色気があった。こうした存在がひとつ屋根の下にあって何もないわけがない。溜息をつきたいのは昌美のほうであった。

「今度こそ……ふたりは付き合い始めたの？」

「え、あ……違う。違うの……」

俯いていた顔を咄嗟に上げて強く否定をした絢子は、昌美と目があった瞬間、ふたたび目を伏せた。長い睫が頬に影をつくり、それがひどく色っぽかった。

「じゃあ、何で？」

「……」

昌美のその問いに対しては、絢子は困ったように頭を振るばかりであった。どこから説明したら良いのか、話の糸口が見いだせず、

絢子はただ俯くばかりだ。それに焦れた昌美は追及を止め、思っていることを口にすることに決めた。

「石川さんには何か事情があるのかもしれないけど、みっちゃんを利用するのは止めてほしいの。石川さんが本当にみっちゃんのことが好きならかまわない。でも、そうじゃないんでしょ？」

そして、つぶやくように「ずるい……」という言葉が最後に耳に届いて、絢子は自然と眉根を寄せていた。誰に言われるまでもなく、絢子のずるさを許容してくれる光宏を利用しているのだと彼女にもわかっていた。

いつかここを出て行かなければならないのに、日を追うごとに居心地が良くなっている。このままここにいられたら――そう願っていることを見透かされたようで、途端に罪悪感が頭を過ぎった。

ただ、現実から逃げずに生きてきた二十八年である。生きることに必死で、その身に降りかかるすべてのことから逃げずにやり過ごしてきた。心を許すことを知らず、人の愛し方も、愛され方もわからなかった。

幸せは、つかもうとする傍からすり抜けていく――。

信じられる人間を失い、途方に暮れた。それでも生きていかなくてはならない。ぎりぎりまで自分を追いつめ、精いっぱい強がった。それでも、逃げ果せない現実を目の前に見せられて、とうとう絢子も力尽きてしまった。その瞬間に脳裏を過ぎったのは光宏だった。そのときはそれがすべてであったのだ。

俊輔が選んだのは、彼の愛した女の忘れ形見である絢子ではなく、面影すら見出せないべつの女であった。そのほうがいいとずっと思っていたはずなのに、裏切られたと感じたのは何故だろう。

恋情の終わりは決定的であった。しかしながら、それが悲しかったわけじゃない。絢子は自分が強くなったと勘違いしたほどであった。ただそのすぐ後に、形容できない息苦しさが彼女を襲った。

もがいてももがいても、そこは慣らされた泥の中だ。いくら底を踏みしめて歩きだそうとしても、足元をすくわれ、立ち上がることすら許されない。この恋を終わることさえ、絢子にはできない。

光宏は、そんな泥まみれの絢子に逃げ場をつくってくれた。それがどれだけ彼女の心を救ったか、彼女自身も、翻って彼のほうもわかってなどいなかった。

「好きだって、言ってよ。そのほうがよっぽどましだよ……石川さんは残酷すぎる……」

絢子は身の置き所をなくした彼の部屋で、まるで置物のように身を固くしてじっとしていた。彼女は肯定も否定もせずに俯くばかりだ。

「謝ったりなんかしないで、認めて？　そしたら、わたしも終われるんだよ」

謝罪まで昌美に封じられて仕方なく黙り込んだ絢子の耳には、壁に掛けられた時計の音だけが聞こえていた。ひとつの恋を終われなくて苦しむふたりの女は、目を合わせることもなく、ただじっとその場に佇んでいた。

## いのちの音を聞きながら　2

遅い時間になるまで、光宏は帰って来なかった。いつまでも帰らない主を待つことにしびれを切らしたのは昌美のほうで、釈然としないままではあったがその場を離れることにした。絢子は彼女が去った後、リビングの床の上に、じっと身を潜めるように座っていた。

次に玄関で人の気配がしたとき、絢子は即座に平素の彼女に戻り、穏やかに応対した。それは寝室へ引っ込むまでつづいた。光宏は彼女の様子がおかしいことに気づきもしなかった。

寝室に入ってベッドを背にして座り込んだ絢子は、枕を抱き、そこに顔を埋めて、声を出さないようにひっそりと泣いた。それが光宏を誘引するものになろうとは、彼女にはわかるはずもなかった。いつしか嗚咽に変わっていくのを自分では止められなかった――ただそれだけなのだから。

翌日、絢子が目覚めたのは随分と朝早い時間であった。光宏はその少し前に既に目を覚ましていて、彼女の身体を両腕で抱き込むようにして、その存外幼い寝顔を見つめていた。小さく身じろいだ後、絢子の瞼がゆっくりと上がっていくのを合図にして、彼は彼女に向かって穏やかに微笑んだ。

ゆっくりと腕に力を込めて光宏が絢子を引き寄せる。規則的な彼の鼓動を感じ、彼女は数回瞬きをする。そのいのちの音を聞きながら、絢子は彼の胸に頬を寄せた。

玄関先で光宏を見送ると、絢子は荷造りをした。たいした荷物でもなく、それはあっさりと終わった。この人を逃げ場にしてはいけない。巻き添えにしてはいけない。絢子はそうしてそこを去ったの

だ。

あの夜起こったあらゆることについて忘れた振りをしてしまえば、始まってもいなかった絢子との関係を終わらせずにいられるのだと、光宏にはわかっていた。気楽な体で、惚けた振りをして、携帯電話を見つけたのだと彼女に返せば、彼女はそれを拒否することなどできないだろうことも。

彼の中ではっきりしていることがあった。

――何もなかったことにはできないし、したくない。

例え終わってしまったとしても、彼女の核心に触れたあの日を境にして、光宏の意識は変わっている。

彼女に思いを寄せてただ遠巻きに見るだけだった、あの少年の日とはもう違うのだ。最初はそうであったかもしれないが、今はもう、初恋を思い出して感傷的になっているわけでもない。もしも彼女の姿が変わっても、きっとこの気持ちは変わらない。

俊輔に取って代われるとは思っていないが、彼女の逃げ場になれるなら本望だと光宏は思っていた。誰が何と言おうと、今回は彼女を絶対に逃がさないつもりで、彼はふたたび俊輔と会おうとしていた。

絢子が大輔に連絡をしたのは、二週間も経ったころのことだった。毎年石川本家に立ち寄っていた年始の挨拶を遠慮したいのだと言うために、彼女は大輔に電話をした。彼が結婚して以降、彼女から連

絡をするのは珍しく、受けた大輔自身も些か驚いていた。

「それでおまえはいいのか」

『うん、いいの。それより……ごめんね。いつも兄さんには嫌な役目を押しつけちゃうね』

「そんなこと気にするな。おまえは妹なんだから、俺にずっと甘えていればいいさ」

大輔は、自分でも無意味なことを言っている自覚があった。絢子は妹だからと無条件で甘えられるような人間ではないことを知っている。しかも、彼が話しているすぐ傍で、妻の由美子がそれとなく聞き耳を立てていることもわかっていた。

それでも言わなくてはならないと彼は思った。彼女の様子から察するに、おそらくもう光宏は彼女の傍にいないのだろう。それを選んだのが絢子自身だとしても、心からそれを望んで選択したわけではないのはわかる。いくら鈍感だといっても、伊達に長い間兄妹をやっているわけじゃない。

「絢子」

返事のないまま、大輔は言葉をつづけた。

「この間、おまえの同級生の市原くんに会ったよ。彼はいい奴だな」

『え……っ』

電話の向こう側で、絢子が驚いている様子が目に浮かんだ。きっと大きく目を見開いたまま、受話器ごとすっかり固まってしまって

いることだろう。

「頼っていいんだ。寄りかかってもいい。おまえがそういうことができないのはわかってるけど、そういう場所があるのは幸せなことだ。俺でもいい、彼でもいい、誰でもいいさ」

声を上げて泣いたってかまわないのだ。彼女は十分にそれを堪えてきた。もう呪縛から解き放たれてもいい。

母親といるときの絢子は、羽をもがれた鳥のようだった。父親が亡くなって以降は以前よりもっと頑なにひとりで生きようとしている。そんな痛々しい絢子を知っても、大輔には何もできなかった。

光宏に会ったのはつい先日の一度きりで、お互い核心を避けて話をしていた。しかし、大輔は彼を信頼するに足る人物だと思った。市原クリニックの息子である身元の確かさもあるが、何よりこの絢子が気を許す存在なのだ。他にどんな理由が必要だろうか。

電話を切った後、惚けたように大輔は由美子に話しかけた。

「年始はふたりで過ごすか」

そんな他愛もない言葉をかけるだけで、由美子は花が咲いたように微笑んだ。彼女の猜疑心の強さには時折うんざりさせられてもいるのだが、それでもこの笑顔を守りたいとも思うのだ。

今度は、大輔が電話をかける番である。本家の当主は、自分と同じくらい絢子を大事な妹だと思っているはずなのだから。

## きみのひかり、僕のくらやみ　1

俊輔は正座をして奥の座敷で待っていた。来るべき時期が今であり、そのときのために今までがあった。彼にとっては予想の範疇であり、その予想が裏切られなかったことにほっと胸を撫で下ろしてもいた。

以前に一度だけ、彼と会って話したことをよく覚えている。十年ほども前の話で、彼はまだ高校生であった。

それまで何事もないかのように隠し果せていた事柄を話すに至った経緯は、たいしたことではない。あの瞬間、俊輔は誰かに話したいと思った。誰でもかまわなかった。いや、多少はかまうけれども、俊輔自身のくらやみについて聞いてほしいと強く願ったのである。

しかし、彼を選んだ直感は間違ってはいなかった。夏のうだるような暑さの中、自分の命を賭けて守ろうとした女を見送った日、ひとつ間違えば俊輔自身も道を踏み外していた可能性があった。意図せずそれを引き戻してくれたのが彼であり、そういう不思議な正しさで以て、絢子をも導いてくれるのではないかという予感があったのだ。

来訪を告げられたとき、俊輔は使用人に命じて彼を奥に通させ、自身はその場を動かずにいた。本来であれば出迎えるのが筋というものだろうが、正確には動けなかったのだ。

程なく現れた彼はすっかり大人になっていて、面影はあるものの、あのときの少年ではなくなっていた。しっかりと名を名乗り、丁寧に挨拶をしてみせた。

使用人が湯呑みを置いて障子を閉める音を最後に、次の一言まで

は音が消え去っていた。俊輔はそれに慣れているのか動揺を見せず、訪問者である光宏のほうは緊張感が増して顔が強張っている。
ごくりと唾を飲み込み、光宏は目の前の俊輔を見据えた。幾らか年を取った感じはするものの、相変わらず威圧感があり、つかみ所のない男である。あれからもう十年が経つのだから、彼ももう四十というところなのだろう。しかし、大人の男らしい落ち着きを備えてはいるものの、年齢不詳であった。

「絢子さんのことです」

光宏は、単刀直入に本題に入った。俊輔を前にして謀など無駄である。

「もう、彼女を自由にしてください」

「私は何も」

「あなたは彼女に一生檻の中に留まる選択肢しか与えていません」

光宏の目には強いひかりが宿っていた。通常、俊輔が他者に圧倒されることはほとんどない。何より場数を踏んでおり、当主となるべく生きてきた彼が動揺を見せることもほとんどない。
それが、どうだろう。何の力も持たずして現れた青年にすっかり圧倒されていた。彼の本気はまるで長い年月をかけて浸透していった地下水脈のようで、その澄んだ流れを汚すことなど一瞬で済むというのに、それをさせない力がそこにはあった。

「きみの言い分はそれだけかな」

「ええ」

「では、私の答えは簡単だ。私は絢子をずっと妹として大切に思ってきた。妹は妹でしかない。遠くにあっても妹だ」

そして、俊輔は唇の両端を僅かに持ち上げて微笑んだ。

「私は絢子に幸せになってほしいと願っている。そのためなら何でもする。約束する」

今度は光宏が微笑む番だった。きっとそう言うに違いないと考えて、用意して待っていたのだ。

「では、絢子さんに会ってください」

俊輔は淡々と話を聞いていた。意外そうでもなく、驚いてもいない。

「ふたりだけで、会ってください」

石川家からの帰り道、何度目かの電話にやっと出てくれた彼女に、光宏は思いを伝えた。

「僕は諦めないから」

電話が壊れたかと思うほどに静かだった。絢子は息を潜めて、つづく言葉を待っていた。

「もう決めたんだ。きみをずっと待ってるから」

もとより彼女の返事を期待していたわけではない。彼は自分の思いをただ伝えたかった。彼女の背負うものを一緒に背負っていく彼の覚悟を知ってほしかったのだ。

エンジンをかけることもせず、光宏は運転席の背もたれに身体を預けて目を閉じた。数分も経たないうちに携帯電話が震えて、ディスプレイを認めて電話に出る。病院からの呼び出しは久しぶりではあったが、以前のような鬱々とした気持ちではなくなっていた。

## きみのひかり、僕のくらやみ　2

年が明けてからのほうが良いだろうと、昌美の母親が気を利かせたのだかどうだか、見合いは延期になっていた。昌美はこれ幸いと異議を唱えることもせず、そのまま話がなくなってしまえばいいとすら考えていた。

昨日、彼女ははじめて釣書を見た。年はふたつ年上の三十歳、誠実そうな顔をしてはいるが仏頂面で映っている。ハンサムではあるが、冷たそうな人だと思った。彼は隣県の大学を卒業し、その後は役所に勤めているらしい。

光宏は決してハンサムとは言えない。誰が見てもおそらく普通で、特別目立つこともない。意外にモテるのは彼の性格に惹かれるためなのか、彼の経歴によるものなのかはわからないが、少なくとも女性に不自由をしたことはないだろう。

とにかく、彼は優しい。裏も表もなく、わかりやすいほど大切にしてくれる。だから、自分が特別な存在になったような気がして心地良い。見た目とは違い、男らしい面もある。昌美にとっては彼が唯一であるから冷静に見ることなどできはしないのだが、贔屓目を随分差し引いても彼がモテることを不思議だとは思えない。

光宏以外の男と付き合ったことがないわけではなかった。通じない思いに疲れて、そんな彼女ごと受け入れてくれるような相手をいつも選んでいたと思う。一番ほしいものは届いたように見えてその実届かなかった。どこへも行けない思いを抱いたまま、彼女は当てもなく彷徨っている。

釣書にあるこの男は、昌美のそんなくらやみに目を瞑ってくれる優しい男ではなさそうである。光宏のように無条件に受け入れてく

れるような男ではないこと――むしろこの男がその真逆であるような気がして、見合いへの憂鬱な気持ちは幾ばくか薄らいでいた。

年が明けて数日後、絢子は仕事始めで会社にいた。融通が利かないなりに努力をする毎日で、ようやく多少なりともうまく進めるコツをつかめてきたように感じている。

午後からは皆出払っており、会社にいるのは絢子ひとりだけであった。たまにそういう日があるのだが、たいていは特に問題もなく一日が過ぎていく。しかし、その日はそうはいかなかった。

何度か応対したこともある同業他社の若社長がふらりと訪れて、絢子しかいないことを告げても、少しだけだと言ってそのまま帰らずに居座っていた。この男は昨年会社を継いだ二代目で、数年前までは名の通った精密機械メーカーに勤めていたそうである。

「なかなか首を縦に振ってはくれないね」

これまでに数度、絢子はこの男から個人的に食事に誘われていた。すべて理由をつけて断っており、今日も同じように断ったのだ。絢子にとってそうした誘いは珍しいことではなかったが、性格のせいなのか、断るのがうまいとは到底言えない。

彼は諦めの悪い男で、今日も引き止めて離してくれない。仕事のつづきがあるのだと、やんわりと何度言っても一向にかまう様子はなく、「真面目なんだね。そういうところも良いな」などと甘い笑みを向けるだけである。

ようやく解放されたのは電話が鳴ったときで、それを理由に応接スペースから席に戻って電話に出た。

「お待たせしました――」

電話を終えるとすぐ傍らに彼が来ていて、こちらをじっと見つめていた。好意を持たれているのは絢子にも理解できる。ただ、それを受け止める余裕は今の彼女にはなく、誘われるだけで憂鬱になる。

一度書類に目を落としてからふたたび彼を見ると、ちょうど目が合った。そのとき出先から戻ってきた社員の声が聞こえてきて、絢子は救われたような思いがした。

絢子の代わりに応対してくれた営業の男のおかげで、今日も逃れることに成功した。その後で社長の中島も戻ってきて、無事に定時で帰宅することができたのだった。

大通りから細い脇道に入ってアパートが見えたところで、見覚えのある人影をそこに見つけた。

「市原くん……」

絢子の声が聞こえたのかどうか、その姿を認めて彼は片手を挙げた。彼女がゆっくりとアパートに近づいていくと、彼のほうもこちらに向かって歩いてくる。

何の言葉も交わさないままで、彼は彼女に近づき、隙間がなくなったところでそっと彼女を両腕で包み込んだ。彼女のほうにそれを拒むような様子はなく、ごく自然にそこに収まっている。それからしばらくあって、ぎこちなく回された彼女の腕が、ささやかな意思を感じさせてはいた。

## きみのひかり、僕のくらやみ　3

身体を離した後、照れくさそうに笑う光宏を見て、絢子のほうも頬を染めて俯いた。あの夜以降会わずにいたというのに、その体温も、優しく回された腕も、絢子は忘れていなかった。

こうして会えば、意識してしまうことを絢子は認めなくてはならない。それはいつ始まっていたのか、彼女にもわからない。彼が昔なじみというだけではないことを強く意識していた。ただの男なのだということをあれほど知らされた夜を一緒に過ごして、それがより深く彼女を揺さぶるようになっている。

「石川さん」

「あの、せっかくだから入って。汚いところでごめんなさい」

促されて、光宏は彼女の後につづいた。電灯の青白い光が彼女の長い髪を一層黒々と見せていた。

ゆっくりと丁寧にお茶を淹れて光宏に出すと、思いの外低い声で「ありがとう」とお礼を言われた。恐らく何か大事な話なのだろうと予想し、少し身構えた。

小さく肯いて顔を上げると、数秒見つめ合った。その一瞬絢子の瞳が左右に揺れた。そこには動揺が見て取れ、光宏は彼女を落ち着かせたくて、ふたたび微笑みかけた。

「石川さんに会ってほしい人がいるんだ」

彼は驚くほど淡々と俊輔の話を始めた。

あの日、俊輔はこんなことを言っていた。

『絢子は私が会おうと言えば来るよ。必ずね』

まるで彼女をコントロールできるかのように話す俊輔に、光宏は怒りを覚えた。しかし、その一瞬後にはもう怒りは消え失せていた。彼はそうやって自分をとことん悪者にしようとするのだということに気づいたからである。

絢子は困り果てていた。俊輔に会いたいとずっと願っていた。俊輔が自分に振り向くことは決してないことを知っていて、それが叶わないと諦めてもいた。

今ここで肯けば、少なくとも会うことだけは可能になる。にもかかわらず、彼女は簡単に答えを出せなかった。原因はわかっている――目の前の彼である。

絢子は光宏に好意を抱いている。それは最初からそうであったのだが、男女の気持ちとは違う次元のものであった。同業他社の若社長の誘いは何度でも断るのに、再会してはじめて光宏から誘われたときは断れなかった。断ることを躊躇わせる何かがそこにはあったのかもしれない。

そして、彼女の恋心の在処を、その向かう先を彼は知ってしまった。それでもいいのだと彼は言う。彼の思いを、彼女が真正面から受け止めようとしたことは、まだない。

目の前の男が自分を好きだと言ってくれたのを忘れたりしたこと

はない。待っていると言ってくれた気持ちに強い感謝の念を持った。今まで向き合わずにきた彼への気持ちの変化について真剣に考え始めた矢先のことだ。

それなのに、彼は俊輔に会ってほしいと言う。その意図が絢子にはわからない。

「わたしは……」

「会わなきゃだめだよ。きみはもう自由になってもいいんだ」

「自由……って？」

光宏は目を細めて絢子を見つめた。笑っているようにも怒っているようにも見える。

「きみが俊輔さんを好きでいるのも自由だ。でも、そうありつづけることを自分に強要する必要はない。人の気持ちは変わるし、それは罪ではないんだよ。僕が言ってるのはそういう自由のこと」

優しい口調ではあるが断定的で、普段の彼からは想像もつかないような強い言葉に彼女は身構えた。光宏は彼女の態度が硬化する前にすべて言ってしまおうと思った。

「少なくとも、あの夜僕がきみと寝たことは一時の気の迷いなんかじゃない。僕はいつまでも待つよ。きみが心変わりしなくても、ずっと傍にいて支えたいと思う」

そしてそこまで告げたところで、彼女は予想通り態度を硬化させた。必死に頭を振って、冷静さの欠片も見えないほど抵抗した。

「支えなんていらないわ！　わたしは自由よ。誰の束縛も受けてないし、これからも変わったりなんてしない！」

彼女を最初に縛り付けたのはおそらく俊輔である。しかし、すぐに彼は解放しようとした。そのやり方が間違っていたせいで、彼女は自分の意思で籠城するようになった。

少女に過ぎない年齢で、俊輔のくらやみを正面から受け止めるしかなかったその痛みはどれほどであっただろう。片思いで終わることは珍しくもないが、彼女が俊輔の思い人を知らされたときの衝撃を思うと、光宏は心が痛む。

それでも、彼女は光宏にとってひかりでありつづける。振り向くことはなくても。彼は取り乱す彼女の両手首をつかんで、無理やりに腕の中に閉じ込めた。強い抵抗をしばらくつづけていたが、やがておとなしくなり、今度は小刻みに震え始めた彼女の髪に頬を寄せた。

次第に震えは小さくなっていき、彼女はくたりと彼に身体を預けた。それはまるで迷子の子供が泣き疲れて眠るように、彼女は彼の腕の中で静かに目を閉じていた。

## 貴方がいなくなったら、きっとさみしい　1

つかまれた手に込められた力強さも、光宏の胸に引き寄せられたときに感じたこの気持ちも、絢子は皆忘れてしまえたらと願った。いつか俊輔に抱き竦められたときと同じ切なさを、まさか彼以外の男にふたたび抱くとは――彼女はその感情に名前があることを知っていたが、認めたくなかった。許せないと思った。

絢子は、ふたたび自分の気持ちがわからなくなっていた。

駅前の喫茶店でコーヒーを頼んで、驚くほど店に似つかわしくない豪奢なコーヒーカップを目の前に置かれていても、絢子は手をつけずにこうしてぼんやりと座ったままだ。

約束の時間まであと一時間。ここからバスに乗り三十分それに揺られ、バス停から歩いて五分、それだけの時間があれば問題なく間に合う。バスの時間まではあと十五分と迫っており、もう行かなくてはならないと思いながらも、彼女はどうしても動けずにいた。

俊輔に会ってしまったら、自分の感情を制御する術がなくなることを絢子は知ってしまった。しまい込んでいた感情が勝手に溢れ出てきて、勝手に彼女の心を揺さぶる。俊輔と同じ屋根の下で暮らしていた頃には表に出すことすら躊躇われたのに、いつしかそれが勝手に顕れて彼女を根元からさらっていく。

何もかも全部、皆あの男のせいなのだ。誰よりも優しく抱き留め、誰よりも甘く囁くあの男がいなかったなら、きっと絢子は俊輔とふたりで会うことなどできなかったであろう。

今もしふたりの手が目の前に差し出されたらどうするだろうか、と、絢子は意味のない問いを自分に向けてみる。光宏に再会するまでの彼女であれば、躊躇なく俊輔の手を取る。少し前までであれば、どちらの手も取らなかった。そして今は、きっと光宏の手を取って

しまうのだ。絢子には、それがどうしても許せないのである。

――それでも、あなたがいなくなったら、きっとさみしい。

心の奥底に隠れていた気持ちを少しだけ表に出してやると、絢子はテーブルに置かれた紙を手に席を立った。俊輔に会わないわけにはいかない――そう気持ちを奮い立たせて。

俊輔が結婚することを発表してから、まだ然程の時間は経っていない。しかしながら、それを知ってからの絢子の時間は、信じられないほどのスピードで彼女をこれまで知らなかった場所へと連れ去った。

絢子は石川家の門の前でひとり、ぼんやりと立ち竦んでいた。会ってしまえば終わってしまうであろう。それは彼女が一番恐れていたことでもある。それでも、もう踏み出すより他に選択肢は残されていなかった。

両手で顔を挟み込み、はっと短い息を吐き、その古く重苦しい門をくぐった。奥に広がる庭園で俊輔と兄と三人で遊んだ日々も、大きな手に縋るようにして玄関へとつづく石畳を歩いた幼い日の思い出も、次から次へと浮かんで、そして消えていく。

すべての物事は流れ、そして小さな何かだけを残して、あとは皆消えていくのだ。

「絢子」

自分を呼ぶ、懐かしく甘やかに胸に響く声。
俯いたまま歩いていた絢子は、その呼びかけに反応して、ゆっくりと振り返った。

会いたくて。
会いたくて、会いたくて、会いたくて。
好きで、恋しくて、焦がれて、苦しくて――彼は彼女のすべてであった。

ずっと、会いたいと、そう願っていた。

絢子は自らの激しい恋情に押し潰されそうになっていたのだが、一方の俊輔はそれに気づいても冷徹な横顔を崩すことはなかった。ここで一緒に兄妹のように暮らしていた頃、もしも少しでも甘く微笑まれていたなら、彼女は家を出ることすらできてはいなかったであろう。やがて不毛な恋に取り込まれて、果ては狂っていたかもしれない。
そう。
ある意味においては、俊輔は彼女を救おうとしていた。彼の心が彼女に向かうことはないのであっても、彼にとっては大切な「妹」に違いなかったのだから。

絢子が俊輔を思う気持ちは、彼には痛いほどわかっていた。何故なら、彼のほうでも同じような――いや、彼女以上に不毛な恋を抱えて生きていたからである。

## 貴方がいなくなったら、きっとさみしい　2

『わたしが愛しているのはあの人だけなの』

一途に追いかけた男に誤解されたまま死んでいったあの女（ひと）は、どれほど無念だったろう――普段は考えないようにしている俊輔だが、こうして絢子を前にすれば、否が応でも思い出してしまう。しかも、それは自分のせいでもあるのだ。彼が強く否定していたなら、彼らは離ればなれにされることもなかった。

母親と相似形の、絢子。

姿形だけでなく、声も、ふとした表情までもよく似た、ふたり。

絢子の不幸は、あの女（ひと）の娘であったということに尽きる。面影などという生易しい言葉では足りないくらい、よく似た母娘である。

もしも俊輔と絢子が今とは別の関係で出会っていたならば――せめて絢子の姿が少しでも違っていたなら、ふたりの関係もまた違うものになっていたことだろう。突き動かされるような衝動のまま、俊輔が絢子を抱くこともできたかもしれない。

彼女の母親ことを、俊輔はただの一度も忘れたことはない。指一本触れることすらできなかったというのに、忘れようにも忘れられなかった。

だから、絢子が自分に抱いている秘めた思いを、彼は見ない振りで遣り過ごすしかなかった。そうすることで自分から遠ざけ、自らの一方通行だった思いを守り通した。忘れ形見である兄妹を守ることが自分の使命だと思い、彼もまたそれに縋るようにして生きてきたのである。

「よく来たね。大輔から聞いて、心配していたよ」
俊輔は静かな調子でそう言うと、穏やかに微笑んだ。「妹」を見る目はいつだって優しくて、それが絢子にはいつも苦しかった。
「ごめんなさい。わたしなら、もう、大丈夫よ」
そして「本当に大丈夫……」と呟くと、絢子は目を伏せ、俯いた。膝の上に置いた自分の手を見つめ、唇を噛み締める。凡そ若い女らしくないその節くれ立った手の甲を見る。じわりと込み上げてくるのは悲しみでも、寂しさでもなかった。
ふっ、と破裂音が聞こえてきて、絢子は弾かれたように顔を上げる。見つめた先で、俊輔はもう笑っていなかった。
「絢子。私はおまえを縛っているかな」
「え……？」
「光宏くんに言われたんだ。絢子を自由にしてやってくれとね。私は……おまえのことを妹だとずっと思って大事にしてきたつもりだ。おまえの気持ちにそれ以外の意味で応えてやることはできなかった」
光宏が俊輔に会っていた――そして、俊輔はこうして終わりの言葉を絢子に告げている。
悲しくはなかった。ただ、終わったのだと、もう終わりなのだとそう知らされて、力がするすると抜ける。
「……っ」

「絢子」

不思議と泣きたくなったりはしなかった。自分の名前を呼ぶ彼の声が、彼女の胸に染み渡る。この温かみを何と呼ぶのだろうか。

「幸せになるんだ。おまえには、幸せになってほしい」

その帰り道、絢子はふたたび駅前の喫茶店にいた。珍しく店内に何組かの客がいて、男のほうは皆、入ってきた絢子をちらちらと見た。こういう興味本位な視線に嫌悪感を持っても、彼女には阻止する術がない。諦めて、努めて気にしないようにするしかないのである。

来たときと同じように彼女がコーヒーを注文すると、今度は艶やかに光る乳白色の上品なカップが運ばれてきた。注がれた琥珀色の液体とのコントラストが美しく、鏡のようにそこに映る自分を、絢子は見つめた。

『光宏くんは、絢子を大切に思っているよ』

――わたしは、わたしは、……。

光宏の気持ちに、絢子はいつも感謝していた。最初は本当にそれだけの気持ちであった。逃れられない俊輔への恋情を認め、その気持ちごと抱き締めてくれた男である。

彼の真摯な思いは、いつしか彼女の中をかき乱すようになった。彼女は混乱し、そしてあらゆることに躊躇い、今では彼の不在をさみしく思っている。

カップを手に、絢子はぼんやりと店内を眺めた。相変わらず不躾な視線を送られてはいるものの、店の主人はカウンターの隅でのんびりと雑誌を捲っていたし、二組のカップルはにこやかに話をしていた。

そんな些細な幸せが、こんな身近にいくつもあるということに気づいて、絢子はひとり微笑んだ。光宏に会いたいと思った。素直にその気持ちを認められたことが、何よりも幸せに思えた。

## 改稿、移転のお知らせ

「泥中の蓮」をお読みくださっている皆様へ

いつもお読みいただきありがとうございます。
作者の華乃と申します。

この「泥中の蓮」については長らく更新を休止しておりましたが、この度、個人サイト「雨の夜」（下の方にバナーがあります）にて改稿を始めました。
話数には変更がありますが、話の筋に大きな変更はありません。
なお、個人サイト「雨の夜」（ＵＲＬ：ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｎｏｙｏｒｕ．ｘ．ｆｃ２．ｃｏｍ／）には一部Ｒ１８に該当する表現を含んだ小説がございますため、１８歳未満の方の閲覧をご遠慮いただいておりますので、何卒ご了承ください。

今後は、そちらで更新していく予定です。
作者の勝手により長らく更新を休止した上、公開場所を中途で変更することになり、ご迷惑お掛けしております。
もし宜しければ、ぜひそちらで続きをご覧いただきたく思います。

最後までご覧いただき、ありがとうございました。

２０１１．９．８　　華乃

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1553o/

泥中の蓮

2011年9月8日11時38分発行